ACTION 2022

災害メモリアルアクションKOBE報告書

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2022

伝える大震災、つながる防災

Disaster Memorial Action in KOBE

目　次

開会の挨拶…… 1

活動発表

兵庫県立舞子高等学校…… 2

兵庫県立明石南高等学校…… 5

滋賀県立彦根東高等学校…… 8

国立明石工業高等専門学校
D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム…… 11

国立明石工業高等専門学校
D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム…… 14

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ…… 17

神戸学院大学 クローズアップ社会研究会…… 20

関西大学 社会安全学部 奥村研究室…… 23

兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム…… 27

パネルディスカッション…… 31

グラフィックファシリテーション記録…… 42

閉会のあいさつ…… 43

災害メモリアルアクション KOBE2022 のことば…… 44

プログラム…… 45

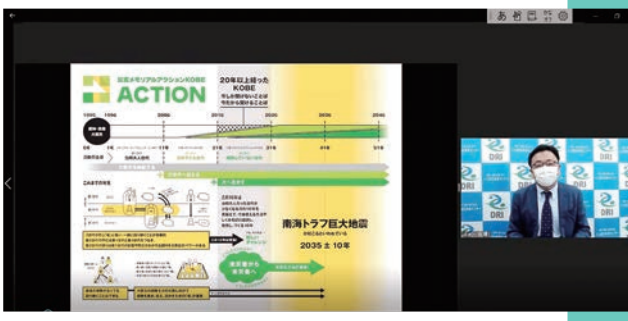
委員・学生名簿…… 47

発表風景等…… 49

災害メモリアルアクション KOBE
ACTION2022

「KOBE のことば」

日　時：令和４年１月８日
　　開会 午前10時00分



開会のあいさつ

牧企画委員長

○牧企画委員長

皆さん、明けましておめでとうございます。

明けましておめでとうございますですけれどもこういう防災の研究をしておりますと、１月17日が来ると、あ、新年だというふうなことも思っておりまして、今年の１月の17日で震災から27年ということになります。

当時、私は博士課程の学生でございました。それで、今日ご発表いただく皆さんはまだ生まれてないというのがこの27年という時間の経過だというふうに思っております。

私たちはずっと阪神・淡路大震災直後から、どう経験を共有していけばいいのかということで活動を行っております。

今、20年目から30年目指して我々が考えてることは、先ほど申し上げましたように、震災を体験していない人が震災を体験していない人にどうやって大震災の経験を伝えていくのかということを一緒に考えていきたいというふうに思っております。

それで、私たちがその答えを、企画委員会というのは、当時、震災の頃から生きてる、世の中に生存していた者がやってるんですけども、我々が答えを持っているということではなくて、若い方と一緒に、どうやったら伝えていけるのかということを考えていこうと考えてこの活動を続けてございました。

この災害メモリアルアクションは、震災の30年まで、あと４年この災害メモリアルアクション KOBE という取組を続けていこうというふうに思っております。その後は、次の世代に引き継げればと思っております。あと４回ということですので、少し最終的なまとめというのも考えていきたいというふうに思っておりまして、今年度のパネルディスカッションのテーマが、「わたしたちが『聴く』ことって・・・」です。この「聴く」というのは、震災を体験していない人が必ず通らないといけない道です。というのは、震災を体験した人は、別に人に聞かなくても自分の経験というのを持ってるわけですけれども、経験をしていない者にとっては、まずは、その体験を聞くということがすごく重要なことになります。今回、まずはこの「聴く」ということについてディスカッションをしていこうというふうに思っております。

それで、聞いた上でどうするのかというと、聞いたことを皆さんが自分なりの言葉に加工して、そのコンテンツを作っていく。それから、さらにその作ったものをほかの人に知らせていくという、こういうプロセスになるわけですが、この３年、４年かけてどういったことが、こういったことについて考えていきたいというふうに思っております。

それで、今出てきた、見ていただいてる図を見ていただくと分かるんですが、震災から30年と言っておりましたが、実は、この南海トラフの巨大地震の発生というのがどんどんどんどんと近づいてきています。阪神・淡路大震災から、もしくは東日本大震災から、それ以外の災害から学ぶだけではなくて、学んだことをどういう形で実際の減災・防災対策につなげていくのかというとこが非常に重要になってきております。

これからいろいろご活動いただいた報告、お話をお伺いして、その後、パネルディスカッションにおいて「聴く」ということについてディスカッションをしていきたいと思います。本日１時半まで、よろしくお願いいたします。

これで私の挨拶とさせていただきます。

兵庫県立
舞子高等学校

災害メモリアルアクションKOBE
兵庫県立舞子高等学校

★チーム目標

私たちが被災者と未災者をつなぐ架け橋になろう

★今年度の活動内容

〇インプット
- 先生方にインタビュー
- 防災読本のアンケート

先輩方から受け継いで行ってきた先生方へのインタビュー。生徒にとって身近な「学校の先生」から、阪神・淡路大震災当時の体験を伺うことで、より自分事として捉えてもらえるのではと考え、インタビューを行ってきました。今年度は新たに7名の先生に、当時の経験や震災を受けて感じた自分の変化、未災者(震災を経験していない世代)へのメッセージを伺いました。

今年度新しく始まった取り組みに「防災読本の作成」があります。作成をするにあたり、内容を中高生が知りたいものに近づけるためアンケートを舞子生に行いました。結果は災害に対して事前の対策が必要で大切だと感じつつも、具体的対策を行っていない人が多くを占めました。また近年印象に残っている災害を挙げてもらうとコロナウイルス感染症と地震が多くを占め、その次に竜巻や津波が追いかける結果になりました。竜巻は、アメリカでの被害がニュースで多く取り上げられたことも大きく関係していると考えられ、学生の興味の矛先をとらえるだけでなく、社会背景や増加傾向にある災害などにも目を向けて、取り上げるトピックを決定していこうと思います。

アンケートのお願い

年　　組

環境防災科「メモアクチーム」は、阪神・淡路大震災を経験していない世代から、さらにその下の経験していない世代に災害の記憶を繋げることを目的とした企画「メモリアルアクションKOBE」の一環として「防災読本」を作成しています。この本には「高校生が知りたいこと」「高校生が疑問に思っていること」をキラく盛り込み、実際に防災教育の現場や、もしもの時に避難所での生活のヒントとして活用できることを目指しています。つきましては、以下の問いにお答えいただきたいと思います。よろしくお願いします。

①災害のニュースを見ることは大切だと思いますか。
(ネットニュースを見る手段は問わ一ません(テレビ・新聞・スマホなど))

はい　・　いいえ

①の問いで「はい」を選んだ方に質問します。
②最近見たり聞いたりした災害のニュースで最も印象に残っている災害は何ですか。下記選択肢から1つ選んでください。

①地震　②津波　③土砂災害　④台風　⑤竜巻　⑥雷雨
⑦豪雪　⑧コロナウイルス　⑨その他(　　)

①の問いで「はい」を選んだ方に質問します。
③ニュース等を受けて、実際に自分で取り組んだ防災対策などはありますか。具体的に答えてください。

①の問いで「いいえ」を選んだ方に質問します。
④なぜ大切ではないと考えているのですか。

⑤南海トラフ巨大地震に対して
現在の状況について以下の三つから答えてください。

1. 不安に思っているので備えている
2. 不安に思っているが備えていない
3. 何もも配していない

ご協力ありがとうございました。

〇アウトプット
- 年表と冊子づくり
- 年表のデータ化
- 防災読本の作成

今年度はアウトプット活動として上記の3つを行いました。2021年から新たに始まった動きもあり、コロナ禍でもできることを精力的に活動できたと感じています。

年表と冊子については、これまで行ってきた活動を継続したものです。新たにインタビューした6名の先生の回答を年表・冊子に加えました。冊子については、1月14日に舞子高校で行われる「震災メモリアル行事」内で配布・公開する予定です。年表については、新たな活用を模索していきたいと思います。

また、これまで作ってきた年表をデータ化する取り組みも始まっています。私たちが手書きで作ってきた年表だけでなく、より多くの方の目に触れられるように、また、手軽に見てもらえるように作業を進めています。

防災読本の作成はターゲットを中高生に絞ったうえで、現在、中高生が知りたいトピックを取り上げるため、内容の話し合いが続いています。左に記したアンケートの結果をもとに、「読んでいて楽しい」「いざとなった時に支えとなる」そんな本を目指して来年度も取り組んでいきたいと思います。

★振り返りとこれから

昨年度はコロナ禍の影響で大きな動きが出来ませんでした。今年度はそういう時だからこそ、次に校外で活動できるようになったときに使えるものを作っていくため、防災読本の作成に踏み切りました。また、大きな地震が多くなってきている今こそ、もう一度災害への備えに目を向けていかなければなりません。「本当に災害時にも使える教本」を目指して作成していきたいと思います。

阪神・淡路大震災から27年を迎えるにあたり、改めて未災者から未災者へ震災の記憶を繋ぐ方法を模索していかなければなりません。震災の恐ろしさを伝えることも繋ぐ上で必要な要素です。しかし、恐怖により災害から目を背け、その恐ろしさから防災・減災までも敬遠してはなりません。震災を経験したからこそ得た人・社会の強さや成長、また人と人のつながりなども含めて繋ぐことが必要なのかもしれません。

○兵庫県立舞子高等学校１　これから舞子高校チームのメモリアルアクションについて最終報告を行います。

メンバーは、３年、三好。

○兵庫県立舞子高等学校２　２年、高橋。

○兵庫県立舞子高等学校３　２年、大﨑。

○兵庫県立舞子高等学校４　１年、義村です。

○兵庫県立舞子高等学校１　よろしくお願いします。

初めに、私たちの目標について、次に今年度の活動報告、最後に、これから来年度に向けて行うことについて話していきたいと思います。

まず、私たち舞子高校チームの目標についてお話しします。

今年度の目標は、私たちが被災者と未災者をつなぐかけ橋になろうです。

昨年度は、新型コロナウイルスの影響があり、思うような活動ができませんでした。今年度は少しでも活動の幅を広げて、被災者と未災者をつなぐかけ橋となるための力を私たち自身が身につけていきたいという思いで、この目標を立てました。

私たちは、被災者の方から聞かせていただいたお話を、私たち自身、すなわち未災者の視点から、ほかの未災者に伝えていきたいなと考えています。お話を聞いて考えたことや私たちの意見を併せて伝えていくことで、被災者の体験をより身近に自分事として捉えてもらいたいと思っています。

次に、今年度の活動報告です。

舞子高校の６人の先生方へのインタビューを基に、昨年までのものに追加する形で冊子と年表を作成しました。また、今年度からは、構想を練り始めた防災読本のためにアンケートを実施しました。

インタビューでは、被災当時の年齢、住んでいた場所、被災当時何をしていたか、心の支えになったもの、災害を経験して変わったこと、私たちに伝えたいメッセージを聞きました。これが、新たにインタビューを追加した冊子です。

ここで、ある先生のインタビューをしたものを発表します。

○兵庫県立舞子高等学校２　ある先生は、阪神・淡路大震災当時、自分の家が半壊しました。

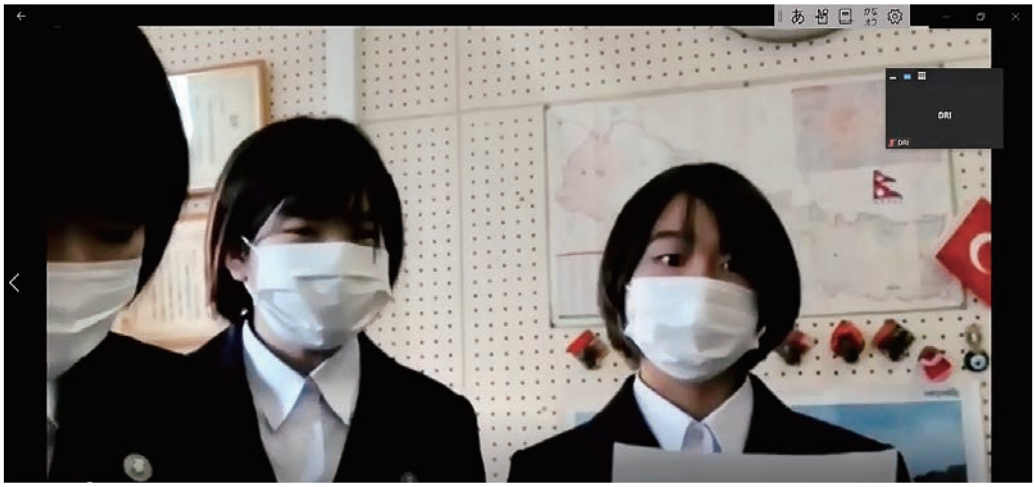
その当時、心の支えになったものは、生徒がたくさんボランティアをしていたことです。震災の前と後で変わったことは、体を動かして恩返ししたい。例えば東日本大震災の現場に行って、恩返ししたいと思ったそうです。私たち未災者へのメッセージは、被災地に行って体験してほしいとおっしゃっていました。

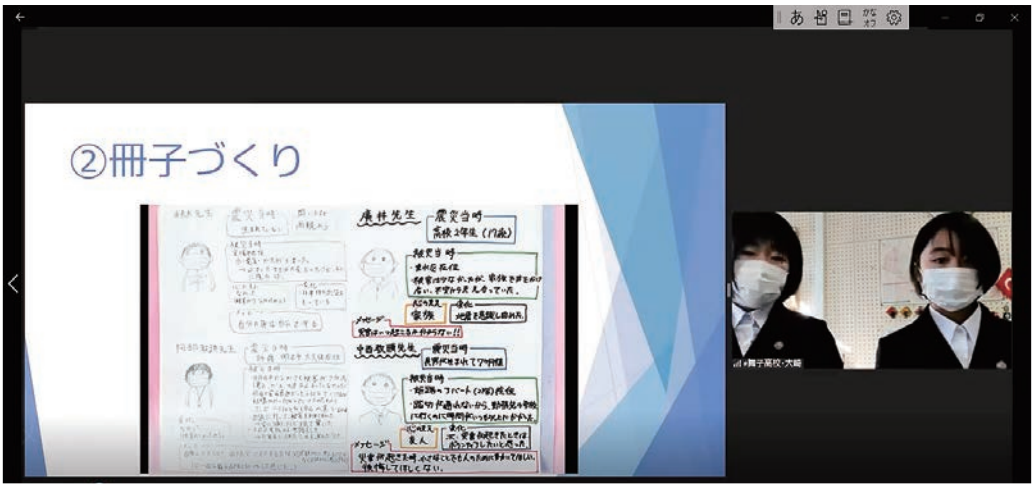
初めてインタビューをした感想を言ってまいります。私は今回初めてインタビューをしてみて、私の今回のインタビューの担当が担任の先生だったんですけど、ふだん震災の話を聞く機会がなかったので、とてもいい機会になりました。

○兵庫県立舞子高等学校３　年表も紙への追加記入を行うと同時に、懸案だったデータ化に取り組みました。

これがデータ化した年表です。このデータ化のデメリットは、手書きよりも安っぽく見えることと情報が少なくなってしまうことです。反対にメリットは、配布しやすいこと、持ち運びやすいことです。

実際にこれから配るときに、配色を考えていきたいと思っています。





次に、防災読本作成の取組です。

作成に当たって、舞子高校の生徒が災害にどれくらい関心があるのか、実際に備えを行っているかなどについてアンケートを行うことにしました。

12月23日、２学期末の防災教育、避難訓練が行われる日に合わせてアンケートを実施しました。アンケートはまだ集計の途中ですが、多くの生徒が、災害に対して事前の対策が必要、大切だと感じつつも、具体的対策を行っていないという傾向が見られました。

アンケートの結果を基に、防災読本に盛り込む内容を決めていき、舞子高校の生徒のニーズに合ったものを作成していきたいと考えています。

最後に、来年度の予定についてお話しします。

来年度は、紙媒体の冊子作り、年表作りの継続。年表のデータ化を継続。防災読本の完成を予定しています。年表は、この取組が始まった2019年からのものを順次データ化していきます。また、防災読本は、アンケートの結果を生かして、読んでいて楽しい、いざとなったときの支えとなる、そんな本を目指して、完成に向けて頑張っていきます。

これで、舞子高校チームの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

兵庫県立
明石南高等学校

めいなん防災ジュニアリーダーMRDP

【活動テーマ】**絆～地域で繋がる防災～**

兵庫県立明石南高等学校

活動の目標

「楽しく防災」

昔の人が生活の知恵として日常生活で行ってきた「防災」を高校生の視点で取り組んでいます。このチームは生徒会や部活動や委員会ではありません。防災、地域づくりに関心のある有志生徒による**高校生の自主防災組織**です。
M(meinan)R(regional)D(disaster)P(prevention)は地域防災に取り組むチームとして名づけました。

1. プロフィール

2013年
　兵庫県教育委員会教育企画課の事業で誕生した。
※生徒会･ボランティア部の生徒
2014年
　公募開始(1年生対象)
※公募にした理由
　災害発生直後に動くのは被災者自身で特別な人ではない！
　⇒「自助」「共助」の観点
　　「いつでも・だれでも」
　　今年は２３名が参加。
　⇒生徒による自主防災の実践グループです。

2. オリジナリティ

Ⅰ　公募で集まった生徒の自主的な活動チーム
Ⅱ　視点を地域コミュニティに置いた取組み
Ⅲ　手作り感覚の活動

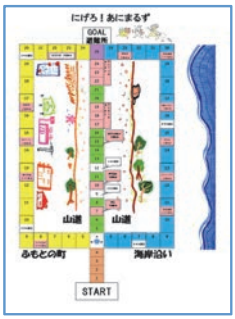
3. 2021年度の主な活動(1月以降は予定)

4月 地域との新たな連携開始❣（市役所・社協等で活動紹介）
5月 地域の高齢者施設「清華苑」と防災に関する意見交換会。
6月 親子で参加する「わんぱく塾」で「にげろ！あにまるず」実施。
7月 地域のボランティア団体対象に「あにまるず講習会」実施。
　地域の高齢者施設「清華苑」と高齢者への防災を企画。
8月 トルコ共和国アランヤ・ライフデザインスクールとのオンライン交流
　災害メモリアルアクションKOBEキックオフミーティング
9月 地域の高齢者施設「清華苑」の方に「防災替え歌」発表
　地域の鳥羽幼稚園で１月に実施予定の「ぼうさいきょうしつ」打合せ。
　地域の鳥羽小学校で防災イベントの打合せ。
　関西学生オンライン防災サミットに参加。
11月 野々池コミセン「みんなの学校」で「にげろ！あにまるず」実施。
　地域のまちづくり協議会主催の防災研修会で「あにまるず」実施。
12月 ウイズ明石「みんなの学校」で「にげろ！あにまるず」実施。
　全国中学生・高校生オンライン防災会議に参加。
1月 災害メモリアルアクションKOBEに参加。
　鳥羽幼稚園「ぼうさいきょうしつ」実施。
2月 地域の社協主催の防災研修で「あにまるず」実施。
3月 和坂小学校で体験版「にげろ！あにまるず」実施。
　明石市防災会議に専門委員として出席。
　宮城県南三陸町で東日本大震災復興支援ボランティア実施。

◎MRDP Original　Boardgame「にげろ！あにまるず」「かいけつ！あにまるず」　Aprontheater「ぐりちゃんたいへんだ！」

●2018年チームで考案した高齢者から子どもまで楽しく防災に取り組める体験型ゲーム「にげろ！あにまるず」を地域の防災訓練で実施しました。
これは🐰🐶🐤の家族が地震発生から避難グッズを持って避難所に急ぐという趣旨のゲームです。
●2019年明石高専D-PRO135°との交流を通じて「にげろ！あにまるず」のゲームボード版が完成しました。さらに、2020年の4月に続編の「かいけつ！あにまるず」が避難所に着いたあにまる一家が避難所で起こるトラブルを解決しながらゴールに向かうというものです。

今年度はこのゲームを使うイベントの依頼が殺到❣
ゲーム制作に頑張ったのに新型コロナウイルスのために実施できずに卒業した先輩たちのためにも、チーム一丸となってイベントに取り組んでいます👍



ボードゲーム版は３～４人のチームで３チーム対抗で実施します。
もちろん、チームでなくてもOKです。

「ぐりちゃんたいへんだ！」は一人で留守番中に地震‼どんな時どうすればいいのかを教えるために作りました。

◎２０２１年のMRDP

地域との連携

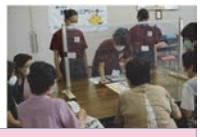
4月7日　地域の厚生館で活動のプレゼン

7月　高齢者施設「清華苑」の職員と意見交換

9月　鳥羽小学校で活動のプレゼン

オリジナル防災ゲーム「あにまるず」で講習会

6月26日　親子参加のイベント「わんぱく塾」


7月10日　ボランティア団体の方々と

2021.8.5　トルコ共和国のアランヤ・ライフデザインスクールと交流❣

オンライン交流に参加

Withコロナはチームに新しい取組みをChallengeさせてくれました!!

２０２１年の新企画

①高齢者向けの防災教材
　防災替え歌・ゲーム
②MRDP版「HUG」
　※作者の倉野康彦氏及び商標権のある静岡県からは「HUG」の名称の使用許可をいただいています。
③小学生向けの防災教材
　ロイロノートで生徒が学べるデジタル教材

○**兵庫県立明石南高等学校１**　皆さん、こんにちは。私たち、めいなん防災ジュニアリーダーＭＲＤＰです。よろしくお願いします。

私たちは、部活動や授業単位、生徒会ではなく、有志のメンバーで活動しています。

私たちは、楽しく、そして明るく地域防災に取り組んできました。そんな私たちなのですが、「絆～地域で繋がる防災」を活動テーマとして地域防災を行っています。

今日は、皆さんに私たちの活動に興味を持っていただけたらうれしいです。

まず、初めに、私たちについてのビデオがありますので、そちらをご覧ください。

〔映像視聴〕

○**兵庫県立明石南高等学校１**　どうでしたかね、少し興味を持っていただけたでしょうか。有志のメンバーなのに人数結構いるんだなとか、何かすごろくみたいなん出てきたけど、あれ何なんやろうとか思った方もいらっしゃるかもしれません。

では、これから、皆さんと一緒にこれまでの防災ジュニアリーダーの活動を振り返っていきたいと思います。

2021年、私たちめいなん防災ジュニアリーダーとしての活動が始まって９年目の年でした。昨年度を一言で表すと「激変」ということになるぐらい、いろいろなことが変化した年でした。

そんな昨年度に激変したことが３つあります。

まず、１つ目の激変は、メンバーが激増したことです。めいなん防災ジュニアリーダーは、2014年から有志のメンバーだけでの活動を行ってきました。有志のメンバーを集めるのに、廊下にポスターを貼ったり、クラスで紹介したりしたのですが、集まったのはまさかの１人でした。しかし、今では23人で活動しています。まさに激変ですね。

結構な人数がいるのんですが、みんなやりたいという気持ちを持って活動できているので、私もこの活動をしていてとてもやりがいがあり、自分のためにもなっています。

続いて、こちらをご覧ください。これは、有志のメンバーの人数を表したものです。一番右側に映っているのが、我らが１世代目の太田先輩です。2014年度は、太田先輩の友達の方が３人新たに加入して４人になり、これが有志のメンバーでの活動の始まりとなりました。それから年々人数が増え、今では過去最高の23人になりました。2014年から今日まで、たくさんの先輩方の思いが積み重なり、今の私たちがいます。先輩方はたくさんのものを残してくださったのですが、それの１つに、ビデオの中にも登場したオリジナルゲームがあります。また、新たな一歩として、いろいろな学校や施設の方と共に防災の輪を広げていきます。

これからは、これらのことについてお話ししていきます。

○**兵庫県立明石南高等学校２**　続いて、激変その２、オリジナルゲームが地域でヒットしました。

先輩方が制作した「にげろ！あにまるず」と「かいけつ！あにまるず」の２つのボードゲームがあります。ウサギ、熊、ひよこの３匹の動物が地震が発生した後、ゴールである避難所に避難するまで起こる問題を解決しながら自助を学ぶのが「にげろ！あにまるず」です。避難した後、避難所で起こる問題をみんなと一緒に解決してゴールを目指して共助を学ぶのが「かいけつ！あにまるず」です。そして、この２種類のボードゲームが明南の周辺地域でヒットしました。

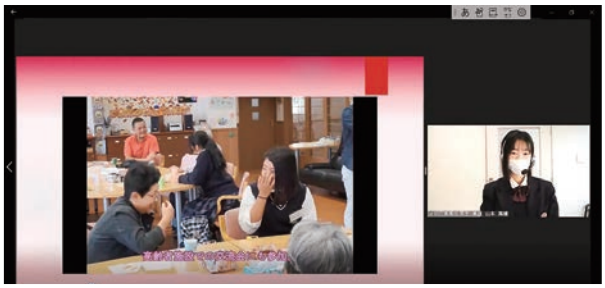
続いて、今年実施した「あにまるず」です。

今年入ってきた１年生が「あにまるず」を紹介できるように、チームで練習会をしました。その後、地域の厚生館やボランティア団体と「あにまるず」をしました。さらには、地域の中学校や地域のまちづくり協議会と「あにまるず」の講習会もさせていただきました。ゲームが終了した後、感想を聞いてみると、たくさんの方から温かい言葉をいただきました。

続いて、激変その３、他校との連携がスタートしました。

11月23日に明石清水高校、続いて、12月16日に加古川南高校、12月21日に高砂高校、この東播地区の３つの高校と連携がスタートしました。今後明南含め、東播地区４校が防災について活動しています。

そして、東播地区だけでなく、西宮にある西宮今津高校との連携もスタートしました。



先日、12月25日にＭＲＤＰのメンバーが４名西宮今津高校を訪問し、2021年度の新作ゲーム、「ＭＲＤＰ版ＨＵＧ」を初めて実施しました。そのもとになった「ＨＵＧ」（避難所運営ゲーム）の作者である倉野康彦さんと静岡県の許可をいただき、避難者と避難所の２つのチームに分かれてカードでやり取りするゲームにしました。倉野康彦さんのアドバイスで、避難者のことばや起こった問題が全て関西弁になっています。

続いて、地域、校外での年間イベント数です。

発足時の2013年は活動が全くありませんでした。しかし、2014年以降、だんだんとイベント数が増えていき、2020年度はコロナの影響で活動ができませんでしたが、2021年度は過去最多の活動数になっています。

これらの活動が、ありがたいことに評価され、昨年度は、ぼうさい甲子園のしなやかwithコロナ賞、そして今年度はＵＲレジリエンス賞を受賞しました。また、12月にテレビ取材があり、１月16日の朝８時半からサンテレビで放送されている「ひょうご発信！」という番組で紹介されています。

これで終わります。ありがとうございました。

滋賀県立彦根東高等学校

滋賀の高校生が震災を伝え続ける意味を考える

＝福島県と滋賀県で震災のその後から学ぶ＝

滋賀県立彦根東高等学校新聞部 「福島をつなぐ」取材班

災害メモリアルアクションKOBE報告会 2022,1,8

はじめに

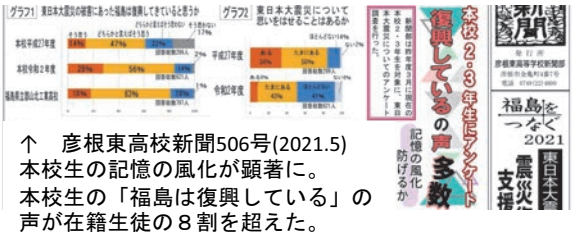
東日本大震災から10年が経った。
被災者でもない私たちがこれからも伝え続ける必要はあるのか？
伝え続ける意味とは何だろうか？

彦根東高新聞部が考えたこと

●実際に発災後10年目の福島に行ってみて、現地の人の声を聴こう
●震災を伝え続ける意義を、当事者のいなくなった過去の地震から探ろう

福島取材

2021年3月に取材。5月に震災復興支援号を発行。福島県双葉町、浪江町など、海沿いの町を取材して回った。校内でアンケートをし、意識調査をした。



↑　彦根東高校新聞506号(2021.5)
本校生の記憶の風化が顕著に。
本校生の「福島は復興している」の声が在籍生徒の８割を超えた。

10年経った今だから語れること、変わらない思いがあることを知る。

姉川地震取材

2021年8月に取材。10月号に掲載。
阪神淡路大震災や東日本大震災も、いつか当事者なき時代がやってくる。
当事者なき滋賀県の姉川地震について、何がどう伝えられているのかから学ぶために取材した。

→彦根東高校新聞５１０号
歴史的にも姉川地域の地震はくりかえしている。**当事者の有無にかかわらず、危機感を持ち続けるためにも**記録し、伝え続ける意味がある。

博物館、気象台、メディア、学校などが連携して記録を残し、伝え、後世の人（≒未災者）が学べるようにする
→これからの防災につながる

まとめ

●今だから伝えられること、今だから伝わることが必ずある
●伝えることと記録を残すことの両方をスクールメディアは果たせる
●くりかえす震災を生き抜くために伝え続ける必要がある

○滋賀県立彦根東高等学校１　発表項目は、私たちが東日本大震災発生後10年間続けている企画「福島をつなぐ」について、そして、前年度までの取組、今年度の取組、そして「福島をつなぐ」を通じて感じたこと、学んでいることについて発表させていただきます。

まず、特集「福島をつなぐ」についてです。

2011年３月11日、東日本大震災が発生しました。そして、その発生から僅か40日後の４月18日、福島県立相馬高校出版局から、相馬高校新聞第139号が届きました。この相馬高校新聞第139号は、以前から交流のあった本校新聞部にも届けられ、当時の本校新聞部員が非常に衝撃を受け、ぜひこれを伝えたいと考え、「福島をつなぐ」がスタートしました。

2011年５月16日、「福島をつなぐ」が開始します。当時の部長が相馬高校新聞第139号について、ロッカーから飛び出た教材が散乱する廊下や本棚が倒れてぐちゃぐちゃな職員室の写真は視覚に訴えてきた、福島には伝えようとしている高校生がいる、その思いを伝える、彦根東高校にはできることがあったとつづっています。私たちの原点を感じるこの記事から、これからも伝え続けていきたいと感じます。

さて、その後、2011年８月３日から７日にかけて、福島県全国総合文化祭が開催され、私たちは411号で特集させていただきました。何年も前から準備が進められていた中でこの震災があり、今年の総文は中止なのではないかと誰もが考えていたそうです。その中での開催で、会場の関係で一部の部門は中止になってしまいましたが、開会式が行われ、その取材もさせていただきました。

開会式で構成劇の主演を務めた生徒さんや相馬高校の相馬太鼓部、また、会津若松市の野菜直売所、旅行会社などを取材させていただきました。震災に立ち向かう福島の思いを伝えたいという原点は今も変わっていません。

2012年４月11日、震災から１年後４年にわたって滋賀県から福島を支援する人を取材し、「つながり続ける支援の輪」をテーマに、取材と新聞の発行を行いましたが、今は毎年発行になり、それは現在も続けています。

連載当初に考えていたこと。それは、まず、多くの人に福島の現状を知ってほしいということです。福島の復興はまだ途上で、伝え続けること、記録を残すことが私たち彦根東高校新聞部にできることではないかと考えていました。また、福島とつながり続けたい高校生がいることを福島の皆さんに知ってもらおうとい

うことも考えていたそうです。終わったことと見られているのではないかという懸念を福島の皆さんから感じることがあったようです。しかし、震災は終わっていない、むしろこれからがもっと大事であるということが当時の部員たちにはあったようです。とにかくつながり続けようという思いから、私たちは今も活動をしています。

さて、前年度までの取組についてご紹介させていただきます。10年分となるとかなり膨大ですので、一部抜粋でお伝えします。

まず、2016年３月１日、震災から５年後の双葉郡楢葉町を取材させていただきました。実際に行って取材をしないと分からないことが多いっていうのが私たちが考えていることで、やはり実際に行って取材をして、その上で記事を書くと、深みも変わると。人と未来防災センターなど、そういったところの施設があることの重要性がやはり感じられて、知るための施設、聞くための施設があることの重要性がいつも感じているところです。

2018年の３月、震災から７年後のいわき総合高校の演劇部さんに取材をさせていただきました。父親を震災で亡くされた生徒さんに、私たちの取材でそのお話を聞かせていただきました。７年たったからこそ伝えられる、聞ける話がある。時間がたったからこそ聞ける話があるというのは本当にそうで、震災直後にはなかなか気持ちの整理がつかずに言えないことがあったそうです。だからこそ、時間がたったからこそ伝えられる、聞ける話があるというのは、これからも私たちの活動の力となりますし、何より伝えていく、その震災を残すという点でも、時間がたったとしても伝えていく、この重要性が私たちがここから学んだところです。

2020年度、震災から10年に際しましては、かつて取材させていただいたところにもう一度取材に行き、「変化したことしていないことを学ぶ」というテーマで取材を行いました。

昨年は、舞子高校さんにも取材をさせていただきました。本当にありがとうございました。

近隣の河瀬高校が福島県へモニターツアーに行くということで、それに同行したりですとか、ジャーナリストの池上彰先生に取材を行いました。

今年度の取組についてです。

今年度の福島の震災復興支援特別号は、本校生徒にアンケートを行いました。そこで、福島は復興しているかという質問をしたのですが、84%の生徒が福島は復興していると答えました。ですが、福島県内でも海に近い浜通りと中通り、内陸側の会津と、それぞれの地域では意識差があるというのを取材に行って知りました。実際この84%という数字は、津波の被害がなかった会津の郡山北工業高校さんで行われたアンケートとほぼ同じ数字でして、やっぱり海側の地域とはまた違った結果になりました。震災復興への意識は多面体ということで、これが本当に実感しました。人によって震災への捉え方は違いますし、もし、震災を聞こう、伝えようとするときに、体験記とか、そういったものを用意するのであれば、本当に非常に多くの人による必要があるのだなと思います。

ここの震災復興支援特別号では、部員の声とかまとめだとかでこういったことを書いたのですが、聞こうとしないと、聞かないと分からないっていうことが本当にたくさんあって、まだまだ伝えるべきこと、伝えなきゃいけないことがあるなと感じています。

今年度の10月号で、滋賀県でかつて、120年前に起こった姉川地震について特集しました。姉川地震はもう120年前に起こっていますので、当事者のなき地震はどう伝えられているのか、未災者が未災者に伝えていく、そういった点で、東日本大震災も阪神・淡路大震災もいつか当事者がいなくなるときが来ます。ですから、そんなときにどう伝えていくべきかということが学べるのではと取材させていただきました。

1909年に滋賀県北東部の姉川付近を震源として発生した姉川地震は、死者35名、負傷者643名以上と、大変、被害範囲は岐阜県西部と滋賀県の広い地域と、広い範囲で被害が確認されていたそうです。長浜城歴史博物館館長の福井さんに聞いたところ、歴史的に、ここは繰り返す地震が起こる地域だそうで、その記録を残して見せることで自分事として捉えてもらうことが必要だと。また、震災直後の記録は残っているのですが、復興の状況の記録がなかなか見当たらない。本当はその後が気になるのにということで、本当にどう復興していったのかは後の世の道しるべになり得ると考えています。ですから、震災の被害やその恐ろしさを伝えていくことだけではなく、震災の様子を残し、そのこ

とも伝えていかなければと感じています。

また、彦根地方気象台南海トラフ地震防災官の関谷さんにも話を伺いました。南海トラフで滋賀県で起こり得ると予想されてる震度が姉川地震で確認された震度とほぼ変わらないと。ですが、津波ばかりに注目が集まって、恐ろしいのは津波だけではないということであったりとか、あとは、地震学では100年はつい最近なのですが、油断してはならないということ。そして何より、記録を残す気象台と記録を伝える報道の両輪、記録と言葉の両輪でこそ伝えられることがあると。防災してみようかなとか、そういった考えを持っていただくのにも、記録と伝えることが大事である。その記録には、その方法も大事である。その方法が大事だと感じています。

「福島をつなぐ」を通じて、私たち彦根東高校新聞部は、伝える伝え方の模索を考えています。人の声を聞いて伝える、記録を伝える報道としての役割を担っています。ですが、確実に伝わっている保障とか、聞いてもらえる保障がないというのがいつも感じていることで、新聞は双方向のメディアではないので、確実に届いているかという実感がないというか、聞いてもらえている実感がないというのがいつも悩んでいるところです。それでも聞いてもらいたい、伝えていきたいというのが私たちのいつも考えているところで、いつか阪神・淡路大震災も私たちが伝えてる東日本大震災も、体験した人がもういない災害になるときがいつか来ます。そのときに必要なのは、聞いてもらうこと、それから聞ける環境、知ることができる環境があることではと考えています。

記憶を残すこと、人と未来防災センターのように記録を残すことをしてもらう環境があること、そして震災の様子や被害や教訓として、復興、伝えること、残すこと、そして、それが知るきっかけにもつなげられるように、私たちはこれからも知るきっかけの提供をして、心に種をまく、いつが芽吹くことを願って心に種をまいていきたい。これからも福島の声を聞いて、多くの人たちに聞いてもらうべく伝え続けていきたいと考えています。

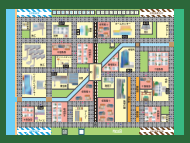
ご清聴ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム

D-PRO135°
明石高専防災団
開発班

今までの活動 Past Activities



私たちは「防災を楽しく、身近に」をコンセプトとして、防災について興味を持ってもらうきっかけとなるようなゲームづくりに取り組んできました。

防災ボードゲーム「RESQ」は「つくる、あそぶ、まなぶ」をテーマに、地震や共助について体感的に学べるゲームです。盤面やカードなど、ゲームに必要なものはすべてホームページから印刷でき、だれでも手軽に遊んでいただけます。

避難所運営ゲーム「チャレンジ！」は、避難所運営についてグループで話し合いながら考える、シミュレーション型のゲームです。
非常時に大切な臨機応変に対応する力、現場対応力を身につけられるゲームとなっています。

小中学校や高校の防災講座ではこのゲームとあわせて、ゲーム内で出てきた状況の詳しい解説や、避難所運営の考え方、実際に自分たちにできることなどを伝える講義も行い、より深く学べるよう工夫しています。

新たな活動 New Activities　Choice の改良

Choiceは風水害をテーマにした防災ボードゲームです。
ゲームの内容は「避難する」ことに焦点を当て、短時間でより身近な体験が得られるよう製作しています。災害の危険性が高まった状態を想定し、避難に関する様々な選択、「ミッション」をクリアしながら、予兆から起こり得る災害を予想しうまく逃げ切る、というのがこのゲームの流れです。

また、ゲームで使うマップは自分たちの住む街のマップに合わせてつくることができ、自分たちが住む地域の危険について学ぶことができるようになっています。

今年度は、カードのデザインや大きさ、マップの使い方の改善とゲームルールの見直し、ルーブリックの改良などゲームのブラッシュアップを行いました。これによってさらに遊びやすくなり、私たちが参加するイベントでの利用はもちろん、広く全国の方に遊んでいただけるようになることが期待できます。

Choice

新たな活動 New Activities　TRY!の開発

TRY!は3種類のカードで3つの遊び方ができる防災カードゲームです。
防災に関する記号やその意味、避難所でのトラブルへの対応方法などの「具体的で実用的な知識」を身に付けてもらうことがこのゲームの目的です。

・1つ目の遊び方は2種類のカードを使用し、災害に関するマークや豆知識を知ることができるカルタです。
・2つ目は、1つ目と同じ種類のカードを使用し、マークとその意味を合わせる神経衰弱です。
・3つ目は、避難所でのトラブル（お題）に対して手持ちのカードを使って対応するゲームです。ここでは1つ目と2つ目の遊びで得た知識が応用できます。

このゲームで得た知識で、災害時に防災リーダーの役割を果たせるようになることが期待できます。

情報発信 Information

Instagram

Twitter

HP

Facebook

○国立明石工業高等専門学校１　こんにちは。明石高専D-PRO135°のゲーム開発班です。

D-PRO135°についての紹介は、後ほど、地域連携班が行います。

本日は、2021年度の活動について、そして、今後の目標についてお話しさせていただきます。

2021年度、D-PRO135°ゲーム開発班では、「Choice」の改良、「RESQ」体験会、新ゲーム「TRY！」の開発を行いました。

最初に、「Choice」の改良についてです。

まず、最初に、「Choice」とは、風水害をテーマとしたすごろくゲームです。マップは自由に作り替えることができ、自分のまちの地形に合わせたマップで遊ぶことができます。ミッションを達成しながら、災害に巻き込まれずに避難するというのがこのゲームの流れで、災害が起こる前には、起こる災害に合った予兆が出てきます。この予兆から起こる災害を予測し、避難場所や避難ルートを決めるのがこのゲームの戦略性の部分になっています。また、何度も遊ぶことで現実の避難での判断力を高められるようになっています。

先ほど述べたように、「Choice」は簡単かつ自由にマップを作り替えられる特徴があります。よって、自分のまちの地形に合わせたマップで遊ぶことができ、非常に地域性が高いゲームとなっています。

中間発表会でも紹介させていただきましたが、キックオフ会から中間発表会までの期間に「Choice」の改良を行うために、定例会でメンバーで実際に「Choice」をプレーし、メンバー内でルールを再確認するとともに、具体的な改善点を共有しました。

これにより、復活できる制度の導入やボードの素材を紙から布へ変更する、アイテムカードの活用機会と当たりのミッション数を増やしてゲーム性を高める、廃止された避難勧告の代替となるアクションを考える、航空券サイズであるカードのサイズを縮小し、白を基調とするデザインにすることで紙とインクの消費を減らすなどの改善点を発見することができました。

中間発表会から最終報告会までの期間は、これらの改善点を踏まえて、Choice ルールブックの作成を行いました。もともと作成していた、左側に表示されている Choice ルールシートを大きく修正し、文字のフォントや配置まで、細部までこだわりました。「Choice」の特徴や遊び方を分かりやすく１枚にまとめて示したことで、短時間で「Choice」について理解して遊べるようになることを期待しています。

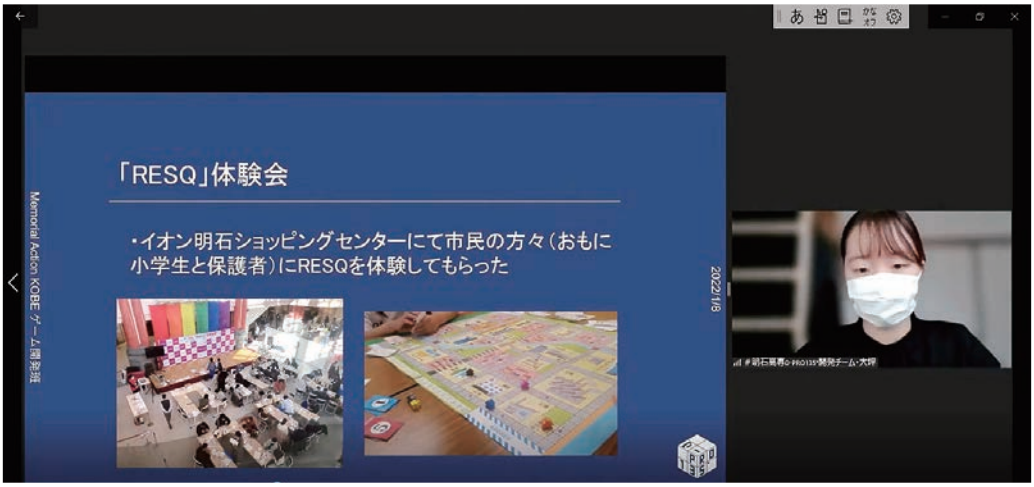
2022年度は、上げられた改善点を基に改良を行い、「チャレンジ！」や「RESQ」のように防災講座などでの使用機会を増やすこと、そして、「Choice」関連のイベントに対応できる部員を増やすことを目標に活動する予定です。

次に、中間発表会で告知させていただいた「RESQ」体験会についてです。これも後ほど地域連携班でも同じ紹介があります。

12月にイオン明石ショッピングセンターにて、市民の方々に「RESQ」を体験していただきました。この体験会を通じて、大人と子供が一緒にプレーしてもほぼ問題ないことが分かりました。また、問題の最中に出てくる「RESQ」のプレー中に行う防災クイズの問題の難易度にも大きなばらつきがあるという課題が見つかりました。2022年度は、「RESQ」のプレー中に行う防災クイズの種類を増やすとともに、これまでのクイズの内容の変更するなどして、難易度が一定である防災クイズの作成に取り組む予定です。

最後に、「TRY！」の開発についてです。

「TRY！」は、防災に関する知識を身につけること



を狙いとしたゲームで、１組のカードで３つの遊び、かるた、神経衰弱、「チャレンジ」の遊び方ができるようになっています。

かるたでは、様々な災害に関するマークや豆知識を学ぶことができます。例えば読み札で、津波とは何ですかと出てくると、津波に関するマークや情報の書かれた取り札を取るといったようにして遊び、かるたと同様、最終的な枚数を競うゲームになっており、災害に関するアイデア出しの前準備になることが期待されます。

神経衰弱では、マークを覚えることに重点を置いています。トランプでの神経衰弱と同様、同じ図柄のカード、この場合はマークと説明が同じカードを２枚見つけて取り、最終的に手元にある枚数を競います。かるたで学んだ知識とひもづけて、様々な災害に関するマークをしっかりと学び、覚えることができるようになっています。

「チャレンジ」は、私たちが作成した避難所運営ゲーム「チャレンジ！」を簡略化したもので、手持ちのアイテムカードを使ってハプニングに対処し、そのできに応じて点数を競うというゲームです。例えば手持ちのアイテムにガムテープと油性ペンがあるとします。そこでメモを貼りたいけれど、紙がないといったようなハプニングが起きます。それに応じて、ガムテープに油性ペンで書いて、そのまま伝言板に貼るといったハプニングを解決する案を考え、それを聞いたほかの人が点数をつけます。そして、一番点数の高かった人が勝ちといったように遊びます。かるたと神経衰弱で災害時の具体的な情報状態を学ぶことで、「チャレンジ」で具体的でユニークな対応策を出してもらうことが期待されます。

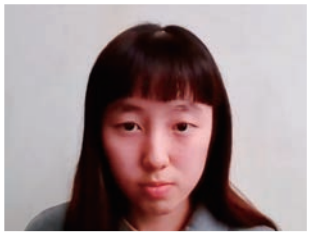
「TRY！」では、かるたと神経衰弱で予備知識や具体的で現実的な災害への恐怖感を持ってもらうことで、防災や避難に関する表示を緊急時に見て具体的な意味を理解できていないと発生する可能性のあるトラブルや選択ミスを減らし、緊急時に知っておればよかったという後悔と正常化バイアスを防止するとともに、「チャレンジ」で、あるもので今の状況をどうにかするという意識を育てて、多くの人が防災リーダーのような役割を担えるようになることを目標にしています。

2022年度は、３種類の遊び方、さらに関連づけれるようなルールの見直しを行い、カードデザインも決定する予定です。「TRY！」を防災講座などで活用すること、そして、どこにでも、誰にでも遊んでもらえるようにインターネット上にカードのデザインを公開することも目標にします。

以上でD-PRO135°ゲーム開発班の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム



《 D-PRO135° 明石高専防災団 地域連携班 》

稲美中学校防災寺子屋

地域連携活動の一環として、稲美町立稲美中学校にて私たちが開発した避難所運営ゲーム「チャレンジ！」を用いた防災授業を行いました。

11 月 2 日には 3 年生に、11 月 6 日には 1、2 年生に向けて私たち学生が避難所で起こる問題や運営方法について様々な意見を共有し、議論しました。また「チャレンジ！」は事前知識のない状態で行い、生徒同士で競いつつ、防災に対する積極的な活動を促すきっかけとなりました。

神戸高専と同様、来年度以降も継続して行っていけるものにしたいと考えています。

地域のコミュニティセンターでの防災寺子屋

地域での活動として、明石市内のコミュニティセンター 4 か所で「RESQ」の体験と防災についてのミニ講座を行います。

このイベントは NPO 法人おーえんくらぶさんとの連携事業で、地域の子供たちとその保護者の方々を対象としています。

普段は防災に興味がない子供たちにも、楽しんで取り組んでもらえるようなプログラムを考えています。

SNS の利用によって、様々な形での連携が生まれています。今後も地域団体や他の防災団体の方との交流や、共同でのイベント運営を積極的に行っていきたいと考えています。

イオン明石「遊んで学んでまるごと高専体験」出展

今年度の新たな活動として、イオン明石ショッピングセンターで行われた、「遊んで学んでまるごと高専体験」というイベントで私たちが開発した防災ボードゲーム「RESQ」の体験会を行いました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2 年前から学内、学外のイベントにボードゲームを体験できる形で出展できる機会がなく、今回が久しぶりの RESQ の体験会となりました。

防災授業とは異なり、人数制限はあったものの幅広い世代の方に参加していただき、また多くの方々に私たちの活動や防災そのものに興味を持っていただくことができました。

今後は人数制限や消毒など、感染防止に十分配慮したうえで、幅広い世代の方にゲームに触れていただける場を増やしていければと考えています。

神戸高専防災授業

毎年、神戸高専にて避難所運営ゲーム「チャレンジ！」を実施しています。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、D-PRO135° の活動報告はオンラインでの実施となりました。

今後の活動

現在、複数の団体からイベント協力依頼が届いています。今後も、「実は防災って楽しい！」のキャッチフレーズを伝えていくために、自分達にできる取り組みをすすめていきたいと考えています。

Twitter

D-PRO135°【明石高専防災団】@135_d_pro

Facebook

明石高専防災団 @d.pro135.e

HP

https://sites.google.com/view/d-pro135

Instagram

D-PRO135°【明石高専防災団】135_d_pro

私たちの活動 About D-PRO135°

2015 年夏に結成された
明石高専防災団 D-PRO135° は
有志の学生が集い日々さまざまな
防災への関わり方を見つけるために日々活動しています。

○国立明石工業高等専門学校２　それでは、メモリアルアクション最終報告会、D-PRO135°地域連携班の紹介を始めます。

発表内容についてご説明します。

まず、D-PRO135°地域連携班の紹介と2021年度の活動紹介、そして D-PRO のこれからの活動目標についてお話ししたいと思います。

それでは、D-PRO135°の紹介を軽くさせていただきます。

ご存じの方も多いかと思いますが、明石高専の防災団体であり、メンバーは現在41人、そのほとんどが防災士の資格を持っています。そして、一人でも多くの方に防災の楽しさ、大切さを知ってもらえるように様々な取組を行っています。

地域連携班では、１つ目、ゲーム開発班が開発したゲームの広報。こちらは、地域の防災イベントなどに参加をして、幅広い年代の方にゲームを体験していただき、楽しみながら防災に触れていただけるきっかけになればと考えています。また、ゲームをプレーしてみた感想や改善点などを伺い、新たなゲームにも生かすようにしています。

２つ目、防災ゲームを用いた防災出前講座、防災寺子屋の実施です。こちらは、次のスライドで詳しく説明します。

そして、SNS、ツイッターやインスタグラムなどを通して防災に関する情報の発信も行っています。

それでは、防災寺子屋についてお話ししていきます。

防災寺子屋とは、幼い頃から防災について知っていただけるために、小・中学校などで行っている防災の出前授業のことです。

授業の流れとしては、初めに、アイスブレイクを行ってから、「チャレンジ！」というグループディスカッション型のゲームを用いて行います。これは、避難所の運営ゲームで、災害時に起こる避難所でのハプニングを事前に予測して、どのような対策を練っておけばあらかじめ対処することができるのかをグループで議論していくというゲームです。最後には、ゲームのまとめとして解説を行い、D-PRO としての模範解答も伝えるようにしています。

防災出前授業というと、単に知識の伝達のみに思われがちですが、それでは子供たちはあまり興味を示してくれません。どうすれば楽しい授業になるのか、ゲームを開発している私たちだからこそできる新しい防災授業の在り方だと考えています。

続いて、2021年度の活動をご紹介します。

稲美中学校の防災講座、これは先ほど説明した防災寺子屋を行いました。そして、神戸高専の防災授業、こちらはオンラインで参加しました。みつばこども園放課後スクールの防災授業とイオン明石での防災イベント、この２つはボードゲーム「RESQ」の体験を中心に行いました。そして、SNS を用いた防災情報の発信。そして、ここには書いていないのですが、NHK さんとサンテレビさんにもテレビ取材していただきました。放送日については、もう少し後で説明します。

では、今年度の活動について詳しくお話ししていきます。

ミナミ中学校の出前講座では、感染症対策に十分配慮しながら講座を行いました。従来は、体育館など１か所に集めて授業を行っていましたが、今回は各教室に少人数で行いました。体育館のときとは異なる場の空気感で、雰囲気づくりや進行の難しさを実感しました。

神戸高専での防災授業は、オンラインで D-PRO の活動紹介や高校生の私たちにできる防災についての授

業を行いました。その後、現地にいる先生方に協力していただき、「チャレンジ！」を用いた防災講座を行いました。オンラインでの防災授業は初めて行ったので、学生の皆さんの反応が見えづらいなど課題もありましたが、今後の活動の幅が広がったのではないかと感じています。

続いて、イオン明石での防災イベントです。明石にあるショッピングモールの一角をお借りして、「RESQ」の体験会とミニ講義を行いました。人数の制限や消毒など感染防止に十分配慮した上で、子供からお年寄りまで、幅広い年代の方に参加していただきました。そして、多くの方に私たちの活動や防災について興味を持っていただくことができました。

そして、SNS を用いた防災情報の発信も行っています。不定期ではありますが、若者をターゲットとしたインスタグラムなどの SNS を活用した防災情報を発信しています。今年度は、主にストーリー機能で日々の活動や防災クイズなどを投稿しました。現在のフォロワーは92人で、少しずつ増えてきてはいますが、まだまだ少ないのが現状です。本日これをご覧になっている皆様も、ぜひフォローのほうよろしくお願いいたします。

そして、先ほど少しお話ししたテレビ取材の日程も、また放送日が近くなればインスタグラムで発信していきたいと思いますが、ここで一応お伝えしておきたいと思います。

NHK さんが１月12日水曜日、「おはよう関西」７時45分から８時内の５分ほど、そして１月18日火曜日、「Live Love ひょうご」18時30分から19時内の５分ほど。そして、サンテレビさんが、１月12日水曜日17時から17時30分のどこかということになります。ぜひ皆さん、ご覧ください。よろしくお願いします。

最後に、これからの活動目標についてお話しして、発表を締めくくりたいと思います。

防災寺子屋の発展、そして防災イベントを積極的に行うこと、さらに、SNS を用いた防災ゲームの宣伝を軸に活動していきたいです。

防災寺子屋の発展では、防災ゲーム以外のコンテンツも取り入れながら、幅広い年齢層に防災に興味を持っていただけるように、授業内容や方法についても改良していきたいです。また、小・中学校だけでなく、幼稚園や保育園などの小さい子供向けの講座などにも積極的に挑戦していきたいです。そのためには、防災授業の内容をそれぞれの場所や学年によって臨機応変に変えていく必要があります。先ほどのお話ともつながることなのですが、場の雰囲気づくりやルール説明、声のかけ方など、部員のコミュニケーション能力の向上も図っていく必要があるのではないかと考えています。

また、防災イベントにもっと積極的に参加していきたいです。来年度は、コロナ終息も願いつつ、明石高専周辺だけにとどまらずに、様々な地域へ出向いて、これまで参加したことがないようなイベントに参加し、これからの D-PRO、そして部員の経験値も上げていきたいです。そして、今年度はほかの団体から声をかけていただいて D-PRO のブースを出させていただいたり、授業の機会を与えていただいたりすることばかりでした。しかし、来年度は自分たちでイベントを企画し、ほかの団体に声かけを行って、自分たちで運営できるようなイベントを開催してみたいと考えています。

D-PRO 主催のイベントで今一番行いやすいと考えているのが、私たちが発案した「チャレンジ！」のオンライン上のイベントです。新型コロナウイルスが流行し、今までは対面でのゲーム形式だった「チャレンジ！」を Zoom を用いてオンラインで行うことが可能になりました。来年度は、この「チャレンジ！オンライン」を用いて、全国各地の方とゲームを通じて防災に興味を持っていただけるように活動していきたいです。

さらに、SNS では、D-PRO をより多くの人に知っていただくために、若者にもターゲットを広げながらフォロワーを増やしていきたいです。投稿頻度を上げたり、防災でも、いわゆる映えと呼ばれるような写真を投稿したり、防災と聞くと、どうしても少し硬いようなイメージがまだまだあると思いますが、私たちからその常識を変えていければと思います。そして、私たちが開発したゲームのルールなどを分かりやすく投稿したり、実際に遊んでいる風景を写真に収めたりして、若者の目に留まるようなものを上げていければと思います。

それでは、これで D-PRO135°地域連携班の発表を終わります。ありがとうございました。

神戸学院大学

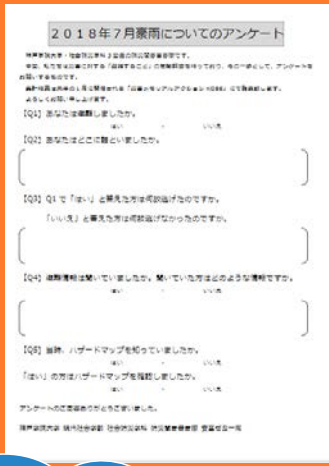
現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ

災害メモリアルアクションKOBE　2021
～どうすれば人は逃げるのか？～

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ

私たちは災害時に逃げていない人をどうすれば逃げてくれるのかを考えています。「防災意識調査の第一歩」として災害情報には必須である「聞き書き」に注目し、「防災聞き書き隊」を結成しました。

アンケート



２０１８年７月豪雨についてのアンケート

【Q1】あなたは避難しましたか。

【Q2】あなたはどこに避難しましたか。

【Q3】Q1で「はい」と答えた方は何故逃げたのですか。

「いいえ」と答えた方は何故逃げなかったのですか。

【Q4】避難情報は聞いていましたか。聞いていた方はどのような情報ですか。

【Q5】当時、ハザードマップを知っていましたか。

「はい」の方はハザードマップを確認しましたか。

アンケートのご協力ありがとうございました。

今回平成30年7月豪雨に実際に被害のあった岡山県倉敷市真備町岡田地区と兵庫県神戸市灘区篠原台に右のアンケート用紙を配りました。
最終的に回答が得られた約200枚回収しました。

インタビュー

現地に行き、被災された方々の思いや教訓をそのまま聞く「災害エスノグラフィー」を意識してインタビュー調査を行いました。
10月17日と11月28日の2回、岡田地区を訪問し、合計7人に話を聞きました。そこから地域コミュニティの大切さ、住民と住民同士での声掛けなど、地域で災害に強い街づくりを作ることが重要であると学びました。

インタビューにご協力いただいた方々、ありがとうございました！

11月21日には篠原台へ2～3人1組になり、実際に被災した5軒の家に、同じくインタビュー調査を行いました。避難経路や避難所等の確認、事前の備え、早期避難の大切さはもちろん、災害時に防災行政無線の街頭スピーカーが、環境音によって聞き取りづらい状況でした。そこから情報を多くの人に伝える手段を考え直す大切さを感じました。

----------Member----------
教授　安富　信
3年　北村 昌卓　青野 柚花　石井 颯　大西 佑奈
覚田 怜　神農 大澄　高村 駿斗　中山 あずさ
中山 翔　三森 悠大　母利 智哉

ポートアイランドキャンパス　〒650-8586　兵庫県神戸市中央区港島1-1-3　078-974-1551

○**神戸学院大学１**　では、今から神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの発表を始めたいと思います。よろしくお願いします。

私たちは、今回のこの１年間で「どうすれば人は逃げるのか」ということをテーマに研究をしてきました。

まず、私たちは、今回、防災聞き書き隊という名称で活動しました。私たちは、安富教授という、元新聞記者の先生の下、実際に被害のあった現地に足を運んでインタビューとかアンケート調査を行いました。インタビューについては、災害エスノグラフィーという観点から被害前後を分析し、意識調査の第一歩を目的とした活動を行いました。

そもそも災害エスノグラフィーというのは何なのかという話なのですが、災害エスノグラフィーとは、災害を体験した人、いわゆる被災者の方に当時の様子をお伺いして、教訓とか知識を学ぶことです。ただ、事前に質問を考えていくのではなくて、実際にいろいろ会話をする中から、いろいろ深く掘り下げていくということを重要視してます。

災害情報とは、自身で調べることも重要なのですが、細かく知るためには、人から聞いていろんな経験というものを知って、そこから対策していくことということも重要になります。

今回調査したのは、西日本豪雨の被災地です。調査場所は、今回２つです。岡山県の倉敷市真備町岡田地区と、もう一つが、兵庫県の神戸市灘区篠原台です。

岡田地区は、少し浸水想定区域でハザードマップの地図を出してきてるんですけども、このハザードマップの上のほう、黄色く囲んでるところ、岡田地区と書いてあるとこですね、その辺りが岡田地区です。兵庫県の神戸市灘区篠原台というのは、神戸の方だと六甲ケーブルの近くとかいう言い方をすれば分かる方もいらっしゃるとは思うんですけども、そちらになります。

そして、これが被災地の、当時の被災したときの写真です。茶色く、水につかってるイメージというのは、西日本豪雨のときの新聞報道とかで少し見られた方もいらっしゃるのかなと思います。篠原台については、こういう泥が、土砂が流れてきてる。岡田地区は、川があふれて浸水したもの。篠原台は、土砂崩れによって被害を受けたということになります。

今回、調査方法としましては、アンケート調査とインタビュー調査の２つの調査を行いました。アンケート調査は、岡山県の倉敷市岡田地区では90枚回収いたしました。神戸市の篠原台では98枚です。合計しますと188枚のアンケートを回収したことになります。イ

ンタビュー調査は、倉敷市の岡田地区には７名の方のお話を伺うことができました。篠原台では、おうちのほうに訪問させていただいて、９名の方からインタビューさせていただきました。

今回、時系列に沿って少し岡田地区について説明したいなと思うんですけども、岡田地区というのは、このハザードマップの地図のほうで、小田川という川が下に流れているのがお分かりになりますでしょうか。その小田川という川からあふれたのが今回の西日本豪雨なんですけども、小田川という川があふれて、まず、真備の中心部というのは、一回、０時頃につかったんですね。その後、岡田地区っていうのは、その０時頃につかったときには、実はまだ、中心部からちょっと離れてますんで、浸水していなくて、その後、７時頃、朝になって、晴れた状態で浸水したことになります。

○**神戸学院大学２**　こちらがアンケートの結果になります。

こちらもアンケートの結果です。

アンケート調査まとめ。

避難をした人は、していない人に比べて数は上回っているが、災害発生時は自宅にいた人も多い。篠原台では、警察、消防の呼びかけによって避難した人も多い。ハザードマップは知っている人は多いが、知っている人でも見ている人は約半分。家族や親戚、孫の電話で情報を得たという回答もありました。

○**神戸学院大学３**　こちら、インタビュー調査、岡田地区のほうの結果です。考え、対策としては、今までのような明るいまちを絶対に取り戻したいという考えの下、岡田地区専用の資料を作成、地区の集まりを開くと、災害から岡田地区を守るため日々奮闘しています。

こちら、インタビュー調査の篠原台の結果になります。考え、対策としては、特に災害が来ても不便なく過ごした。後悔したのは、ここに土地を買ったことという考えもあるそうです。

インタビュー調査、こちら、１人ずつの考えになり

ます。

岡田地区、岡野さん、70代女性。５年間準備や勉強をしてきたが、何もできなかった。他地区から浸水が始まったが、その情報を入手できなかった。情報の共有の仕組みが必要だ。

篠原台、石田さん、30代女性。実際に泥水が流れてきているのを見て避難した。ニュースなどで災害情報を見ても、恐らく避難していなかったと思う。

篠原台、山崎さん、70代男性。災害の被害に遭っても、意識が高くなる人と高くならない人がいる。生活環境によっては、次に災害が起こっても家を建て直せばいいと言う人もいた。

篠原台、近藤さん、57歳、女性。福井さん、58歳、男性。助け合いの大切さ、避難するときはもちろん、安否確認もそうだし、災害後の復旧復興に向けての準備でも、たくさんの近所の人たちに助けてもらっていたことから、地域でのコミュニケーションを日頃から行っていくことが大事だ。

同じく近藤さん、福井さん。災害によって家が半壊になってしまい、周りの家はほとんど取壊しを選択していたにもかかわらず、親が建ててくれた家をもう一度建て直したいという思いでいる。手を取り合ってたくさんの人にもたくさん支えてもらいながら家を建て直し、つらい経験だったけど、今は幸せだ。

同じく、近藤さん、福井さん。また同じような災害が来ても、もう逃げられないし、変な話、ここで死んでもいいという割り切ることができた。

篠原台、田中さん。事前避難を周りに促すなどの、周辺住民と協力して避難した。貯蓄として、１週間分の水と食料を持っていた。

篠原台、前谷さん。避難情報（天気予報）をテレビでずっと見ていて、それで、土砂が流れたらすぐに逃げなければならないと素早く判断した。

岡田地区、藤本さん。避難場所に若い人がたくさんいて、その人たちがボートなどを使えば助けられる命が増えただろう。

岡田、篠原台両地区から、自分のことは自分でしか守れないから、まず逃げることが一番だ。そして、少しでも違和感や不安があれば、避難情報関係なく、思い切って逃げることが大事。安易に考えず、防災グッズを日頃から準備しておくことが大切。

○神戸学院大学２　篠原台、30代女性。常に家の中を整理しておくことで、避難時に持ち物を考えないようにできる。特に子供がいる家としては、逃げる際にランドセルなどの高級品は流されてしまって買い直すのはしんどいので、子供のものは持って逃げるようにする必要がある。

岡田地区、30代男性。地区内でグループをつくることで、班長を中心に日頃から連絡を取り、災害時に焦りを少なくすることができると感じた。

岡田、篠原台両地区から、災害情報を人に伝えるときに大切なことは、誰が聞いても理解できる内容であるか。そして、災害時に人に伝わるものであるか。土石流や雨の音など災害音で防災無線の声がかき消されて、住民に聞こえていなかった。そのため避難が遅れた人もいた。

インタビュー調査まとめです。

岡田地区、もともと災害意識の高い人が多い。岡田地区は今まで浸水したことがなかったからこそ大丈夫だと思っていた。災害当時晴れていたため、一度家に戻って被災した人が多かった。

篠原台、実際に土砂が流れてきているところを見て避難した人が多かった。自分の判断で逃げた人が多かった。

これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

神戸学院大学
クローズアップ社会研究会

号外　全力！学院タイムズ

編集・発行
クローズアップ
社会研究会新聞局

全力!学院タイムズ　2022年（令和4年）1月発行　号外

社会になぜを問いかける

クローズアップ
社会研究会

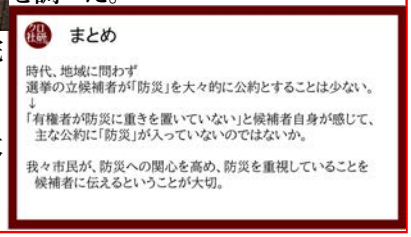
社会をもっと知りたい！という気持ちから昨年５月に発足したクローズアップ社会研究会。現在は、神戸学院大学現代社会学部を中心とする学生と同学部教授の安富顧問の合計８名で研究会を構成する。

活動分野は、政治やスポーツ、芸能、そして防災に至るまで幅広い分野に興味・関心を持ち、なぜ!?という疑問を大切に、歴史的背景や物事の構図などを知り、研究を行い、発信している。

クロ社研の活動

メモアクでの軌跡

兵庫県知事選挙・衆議院議員総選挙（兵庫県の選挙区）・神戸市長選挙の候補者の公約を基に、社会に対して防災や災害がどの程度取り組むべき事項として取り上げられていたのかを調べた。


まとめ

時代、地域に問わず
選挙の立候補者が「防災」を大々的に公約とすることは少ない。
↓
「有権者が防災に重きを置いていない」と候補者自身が感じて、主な公約に「防災」が入っていないのではないか。

我々市民が、防災への関心を高め、防災を重視していることを候補者に伝えるということが大切。

最終発表では、過去の衆議院議員総選挙との比較および、高知県と和歌山県を調べることで、南海トラフ地震で甚大な被害が出るとされる地域と兵庫県を比較した。

メディアの力を借りて社会に発信！

全力!学院タイムズの発行

学院タイムズ
バックナンバー
はこちら！⇒

○神戸学院大学４　では、ただいまよりクローズアップ社会研究会、最終発表のほうを始めていきたいと思います。

本日のプレゼンター、私、稲澤遥樹と。

○神戸学院大学５　私、國松万熙です。よろしくお願いいたします。

○神戸学院大学４　よろしくお願いいたします。

では、早速、私、稲澤のほうからプレゼンのほう始めさせていただきます。

まずは、このクロ社研、クローズアップ社会研究会というもの、どんな団体かというところと、そして、今まで中間発表とどんなことをしてきたのかなというところ、少し話していけたらいいなと思っております。

急遽オンラインということでちょっとばたばたとして、ここ数日やってきたんですけれども、頑張って伝えれるようにやっていきたいと思います。

私たちクロ社研は、マスコミや政治、防災、スポーツ、文芸などなど、社会というものを包括的に捉え、自由に学び研究することを目的に設立いたしました。

途中の中間報告では、我々は、選挙を防災の観点から見るというところで、先日行われた神戸市長選挙、そして、第49回衆議院議員総選挙について研究を行いました。

まずは、神戸市長選挙からです。

神戸市長選挙、今回は合計５名の候補者の方が名のりを上げたんですけれども、その中に、このように６つの公約だったり、主な公約というところに、防災、災害に関することを踏まえられてる方は鴇田さんたった１人だったですね。

ほかにも、衆議院議員選挙兵庫１区に着目して見てみますと、盛山さんという方が、この辺りにちっちゃく、国土強靱化により災害被害を減災化し、安心の暮らしを実現しますと、少し小さいんですけども、一応書いていた。逆に言うと、兵庫１区、これ以外書かれてなかったということがあったんですね。

そこから、中間考察といたしまして、公約で防災を第一に掲げる候補者は少ない。候補者が重きを置いていないと。これは、候補者が悪いのではなく、有権者がそこまで防災に重きを置いていないと候補者自身は感じている、逆に私たちは感じさせてしまっているというところから、主な公約に防災が入っていないのではないかなというところを感じました。だからこそ、我々市民が防災への関心を高め、防災を重視してるということを伝えるっていうことが大事なんじゃないかなというふうに中間考察では行いました。

では、ここでクローズアップということで、今回の中間発表のときの質疑応答、アドバイスの際に、じゃあ、コロナ禍じゃないときの衆議院選挙の公約どうだったか。今後大きな災害が起きるとされてる地域の候補者の公約どんな形だったというアドバイスをいただきました。

ということで、私たち、早速そこについて調べてきました。

では、國松さん、よろしくお願いいたします。

○神戸学院大学５　では、ここからは國松が担当させていただきます。

先ほど中間報告で兵庫県を取り上げたと言いましたが、兵庫県以外の高知県と和歌山県にクローズアップいたしました。この地域を選んだのは、将来起こり得るとされている南海トラフ巨大地震で大きな被害を想定されてる地域だからこの２つの都道府県を選ばせていただきました。

では、早速、高知県を見ていきましょう。

私たちは今回の研究をするに当たって、選挙公報というものと候補者個人のホームページを参考に研究してまいりました。

まず、左側のほうが第49回衆議院議員選挙の高知１区の候補者の４名の方です。右側が２区の３名の候補者となっています。１区、２区合わせて７人候補者がいらっしゃいました。

では、このうちの何名が災害、防災に関する公約を掲げていたのでしょうか。

まず、１人目。この方は、国土強化の中に南海トラフ地震及び首都圏直下地震への大規模な対策を実施すると掲げております。

そして、７人中２人目がこの尾﨑正直さんです。この方は高知県の知事を何と12年間も務めておられました。そんな経験の中でも防災というのはやはり大切だと考えられているみたいです。この方のホームページにも防災に関する発信をされているので、この方は比較的防災、熱い思いを持っている方なんだなという印象を抱いております。

そして、高知県は、もう１人、立候補者の中で防災を取り扱ってる方がいたんですけれども、その方はあまり防災について、軽く触れているっていう程度で、そこまで書かれていませんでした。

高知県は、立候補者７人のうち、主な政策に防災を

掲げている人はたった３名ということが分かりました。

では、同様に和歌山県を見ていきましょう。

和歌山県は、１区、２区、３区に合わせて10名の候補者が名のりを上げました。このうちの何名が災害、防災に関する公約を掲げていたのでしょうか。

まず、１人目は、元総務大臣の石田真敏さんです。この方も防災・減災をすぐに対応すべき課題として取り上げています。

そして、この二階俊博さん。この方も、ふるさとが政治の原点ということで、ふるさとである和歌山県の地震、津波から命を守るということを掲げておられました。

もう１人、掲げている候補者がいらっしゃいましたが、小さくしか書かれていなかったので、今回省略させていただきます。

和歌山県は、立候補者10名のうち、主な政策に防災を掲げている人は３名しかいませんでした。

中間報告で調べた兵庫県、そして今回調べた高知県と和歌山県で比較したところ、全体の候補者のうち、水色の部分が防災を掲げていなかった候補者、そしてオレンジの部分が防災を掲げていた候補者というように、割合を示してみました。そうすると、高知県が比較的防災を主な公約に上げていた人が多かったということが分かりました。でも、いずれの都道府県も過半数を超える方が防災を掲げていなかったということも分かりました。

そのことから、私たちは高知県と和歌山県の候補者の公約を見て、２点、気づきがありました。

まず、１つ目は、南海トラフ巨大地震の発生が想定されている地域であっても、防災を重視していない候補者はまだまだたくさんいるということです。でも、その一方で、防災を掲げている候補者の中には、防災に熱心に取り組もうとしている候補者もいらっしゃいました。

○神戸学院大学４　では、もう一度、ここでクローズアップということで、先ほどまでは兵庫県以外の場所というところで見てきたんですけれども、ただいまよりは、コロナ禍前、時間軸を少し昔に回してクローズアップしていきたいと思います。

では、第47回衆議院議員総選挙、2014年なので、私たちが13歳、中学校１年生のときに行われた衆議院総議員総選挙です。このとき兵庫県での立候補者は17名いらっしゃったんですけども、では、その中に何名、

防災を掲げてらっしゃったでしょうか。ちょっと考えてみてください、いかがですかね。

では、早速見ていきたいと思います。

１人目。１人目は、筒井さんという方です。こちらも、実現へ全力というところの中に、地震、津波に強いまちづくりというところを掲げてらっしゃいました。

２人目は、赤羽さんという方ですね。この方も、防災・減災、ニューディールで景気回復を実現するという中に掲げられております。

では、３人目。高橋さんという方がいらっしゃったんですけども、その方も学校の防災の、耐震化ですね、を強化しますというふうに兵庫４区で出馬されてたんですけれども、その方がいらっしゃいました。

という形で、2014年の第47回衆議院総選挙では、17人中３人しか防災を主な公約に掲げていらっしゃいませんでした。

というところからも、最終考察として、時代や地域に問わず、選挙の立候補者が防災を大々的に公約の一つとしてすることは少ないんだなということが正直な感想でございます。そのようなことから、有権者が防災に重きを置いていないと候補者自身は感じて、やはり主な公約に防災が入っていないのではないかなというふうな結論に持ってきました。

中間考察と多少かぶるところが多いと思うんですけれども、やはり我々市民が防災への関心を高め、防災を重視しているということを候補者にこれからずっと伝えていくということが大切なんではないかなというふうに思いました。

以上で私たちの発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

関西大学
社会安全学部 奥村研究室

Graduate School and Faculty of Societal Safety Sciences　FSS

阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？
熊本市における2016年熊本地震による関連死の実態把握

山﨑　健司　Kenji YAMASAKI / 関西大学社会安全学部４年

背景・目的

阪神・淡路大震災で，**大きな精神的ストレス**と**劣悪な生活環境**によって失われる命があるということが初めて社会的に認知された．**「災害関連死」**である．しかし，その後も関連死は**繰り返されている**．

2016年熊本地震でも218名の関連死が発生した．本研究では，熊本地震の関連死の発生状況を詳細に調査し，阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのかを検証する．本調査は熊本市で発生した82名の関連死を対象とし，**持病**との関係を明らかにする．

ICD-10とは異なる国や地域から，異なる時点で集計された死亡や疾病のデータの体系的な記録，分析，解釈及び比較を行うため，世界保健機関憲章に基づき，世界保健機関が作成した分類である．
（厚生労働省HPより引用）

手法

用いる資料は，熊本市から提供を受けた**弔慰金支給審査委員会の答申結果一覧**である．

持病と関連死の関係を以下の流れで分析する．

（１）**国際疾病分類（ICD-10）**に基づいて82件の関連死の死亡原因を分類する．（２）分類された死亡原因群別に**持病保有者数**を整理する．（３）持病についてもICD-10に基づいて分類し，**持病と死亡原因の種類の関係**を分析する．

(c)弔慰金支給審査委員会答申一覧のイメージ

図１　調査に使用するデータ

結果

図２　ICD-10に基づく関連死の死亡原因の分類

表1　関連死の死亡原因と持病の関係（ICD10に基づく）．1人で複数の持病を抱えている場合もある．　単位（人）

死亡原因の種類	ICD10コード	A	C	E	G	I	J	K	M	N	R	T,S	-	関連死 持病有 a	関連死 持病無 b	関連死 合計	持病保有率 a/(a+b)
感染症及び寄生虫症	A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	50%
新生物（腫瘍）	C	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	100%
内分泌，栄養及び代謝疾患	E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	100%
神経系の疾患	G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
循環器系の疾患	I	0	0	4	0	11	2	0	1	0	0	0	4	16	6	22	73%
呼吸器系の疾患	J	0	2	4	1	5	12	2	0	1	0	0	7	19	13	32	59%
消化器系の疾患	K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
筋骨格系及び結合組織の疾患	M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
腎尿路生殖系の疾患	N	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-
症状，徴候及び異常（※1）	R	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	3	6	50%
損傷，中毒及びその（※2）	T,S	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3	1	4	75%
ICD10に記載のない疾病（※3）	-	0	0	3	1	7	0	0	0	0	0	0	5	11	3	14	79%
合計		0	3	13	2	23	15	2	1	1	0	0	22	55	27	82	67%
持病保有関連死者（55名）の各種持病保有率		0%	5%	24%	4%	42%	27%	4%	2%	2%	0%	0%					
関連死者（81名）の各種持病保有率		0%	4%	16%	2%	28%	19%	2%	1%	1%	0%	0%					

（※1）症状，徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの
（※2）損傷，中毒及びその他の外因の影響
（※3）コードはないが11人中8人は心臓に関連する死因であり循環器系疾患に分類が予想される

図2・　82名の死亡原因は，**8種類の疾病群**（ICD10の大分類）に大別される．
・**呼吸器系疾患，循環器系疾患**の2種類で全体の**6割以上**．
表1・　**67%**の関連死が**持病保有者．疾病群に依らず**持病保有者の割合は**5割以上．**
・**持病有の死者の54.5%**が**持病と関連死の死亡原因が同じ．**
図3・　**関連死の高血圧保有率**は**20%．平時における高血圧症保有率60%**より低い．

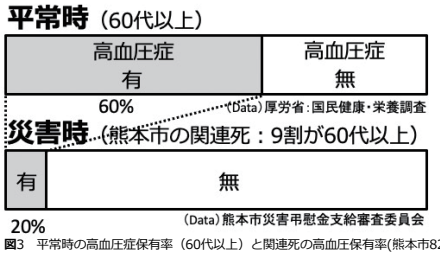


図3　平常時の高血圧症保有率（60代以上）と関連死の高血圧保有率(熊本市82名)

結論

1. 本研究の結果は，**「普段から持病と向き合っているからこそ，災害時にもうまく対応できる有持病者もいる」**ことを示唆するものであった
2. （１）**そのような有持病者が命を落とす場合があるとするならば，それはどのような場合なのか．**（２）**災害時に命を落としやすい有持病者とはどのような方々なのか．**さらに，検討が必要．
3. 阪神・淡路大震災では，これらの問題がどのように認識され，どのような教訓が導出されたのか．誰がその教訓を使い，熊本地震における熊本市の有持病者の犠牲がどれだけ軽減されたのか，さらに分析を進めたい．
4. さらに，(3)2000年代，我が国の医療体制は大きく変化した．当時の教訓がそのまま現在にも通用するとは限らない．

社会安全学部 / 社会安全研究科
総合防災・減災学分野 奥村研究室

○関西大学１　関西大学社会安全学部４回生、山﨑健司です。

今回のお題は、「熊本における2016年熊本地震による関連死の実態把握　阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか」というお題で発表させていただきます。

それでは、背景です。

阪神・淡路大震災では、大きな精神的ストレスとして、劣悪な生活環境などによって失われる命があるということが初めて社会的に認知されました。これが災害関連死というものです。しかし、その後の災害でも関連死は繰り返されております。2016年熊本地震でも218名の関連死が発生しました。

こちら、218名のうちの、どこの市に何名の方が亡くなったのかというものを表しております。

目的です。熊本地震の関連死の発生状況を詳細に調査し、その結果を基にして、阪神・淡路大震災の教訓が生かされているのかを検証します。本調査は、熊本市で発生した82名の関連死を対象とし、持病との関係を明らかにします。

では、今回使うデータです。熊本市に関する以下の資料を使います。熊本市災害弔慰金支給審査委員会答申結果一覧というものを使いました。こちらは、第２回から第46回の資料で、平成29年６月23日から平成30年５月28日までの分になります。

書かれてあった項目に関してです。５つ書かれておりました。まず、１つ目、年齢、２つ目、性別、３つ目、死亡日、４つ目、死亡原因、５つ目、死亡経過と判定理由。この５つ目の死亡経過と判定理由の中に、持病の有無、避難生活の有無、地震で被災した場所、死亡時の生活環境が書かれておりました。こちら、４番と５番、死亡原因と死亡経過、判定理由のみ閲覧可能でした。こちらが81名分ございました。そして、熊本広域行政不服審査会答申書、そして審査庁裁決書というものがございまして、こちら１名分。合計82名の関連死のデータを対象にしました。

では、手法です。①番、持病と関連死の関係です。全ての関連死について、国際疾病分類、ICD-10 に基づいて死亡原因を分類します。分類された死亡原因分別に、持病保有者数を整理します。そして、持病についても ICD-10 に基づいて分類し、持病と死亡原因の種類の関係を分析します。

手法②番、関連死発生プロセスにおける持病の位置づけです。フォールトツリーアナリシス、FTA を用いて、死亡原因ごとの関連死 FTA 図を作成し、関連死発生プロセスを可視化します。さらに、持病とほかの事象との関係も考察します。

じゃあ、手法の続きです。ICT-10 とは何ぞやということで、ICD-10 とは、異なる国や地域から異なる時点で集計された死亡や疾病のデータの体系的な記録、分析、解釈及び比較を行うため、世界保健機関憲章に基づき、世界保健機関が作成した分類です。

これは、ICD-10 の実際のものになります。ICD-10、コードが割り振られておりまして、例えばＡだと、感染症及び寄生虫症、Ｃ、Ｄ48新生物、これがんですね、新生物（腫瘍）というものがございます。感染症及び寄生虫症の中にも、さらに詳細な分類、大分類の中に、さらに詳細な分類がございます。

続きまして、FTA の説明をいたします。FTA とは、1960年代にミサイル制御システムの安全性分析のために開発されたリスク分析手法です。災害のリスク分析にも応用されております。下が FTA の人命損傷の FTA 図、オカダ2017より引用しております。

頂上事象に、好ましくない、分析の対象となる望ましくない事象がきております。こちらでいうと、避難遅れ、孤立が望ましくない事象。この避難遅れ、孤立というものは、救助遅れ、逃げ遅れ、この２つが両方発生して、避難遅れ、孤立につながります。これを AND ゲートと呼びます。

救助遅れのほうに注目しますと、なぜ救助遅れが起こるのか。これは、警備通信システムの不備、もしくは訓練不足、どちらか一方が起こることにより救助遅れにつながります。こちら、OR ゲートと呼びます。

じゃあ、AND ゲート、OR ゲートを使って分析していきます。

結果１です。ICD-10 に基づく死亡原因の分類をしました。ICD-10 に基づく死亡原因の分類をした結果、７種類の疾病分に分かれました。こちら、ICD-10 に記載のない疾病に関しては、記載がないので、分類としては入れておりません。

分類したところ、循環器系疾患、そして呼吸器疾患、合わせて53名、全体の60％以上が循環器系疾患、呼吸器系疾患に大別されます。こちらが死亡原因の分類で分かったことです。

結果２です。死亡原因の種類と持病の有無、持病の有無の関係について見ていきます。67％、全体の関連死者、熊本市の関連死者のうちの67％の関連死者が持病保有者でした。そして、疾病群による持病保有者の割合は50％以上でした。こちら２つが分かったことです。

続きまして、先ほどは持病有無、持病ありなのかなしなのか見ましたが、続きまして、持病あり、ありのみに注目しております。持病ありの関連死に注目しました。死亡原因の種類と持病の種類の関係です。こちら、何の表かなといいますと、ICD-10 に基づいて、持病の種類と死亡原因を整理したものです。この ICD-10 があるおかげで、持病と死亡原因の関係がすっきり関係が見れるということが ICD-10 を使った利点になるかなと思っております。

そして、具体的に説明します。

注目していただきたいのが、この黒枠で囲まれたここですね。ここは、つまり持病の種類が循環器系の持病を持っていた方で、循環器系疾患の持病を持って循環器系疾患で亡くなった方、この方が11名いました。

こちら、呼吸器系疾患。呼吸器系疾患の持病を持って呼吸器系疾患で亡くなった方が12名いました。

こちら、新生物、がん。がんを患ってがんで亡くなった方。これは 1 名いました。

そして、計算をしたんですけれども、持病関連死亡原因で亡くなった方が何人いるのかということを計算しました。ICD-10 に記載のない疾病は分類できないので、こちらの人数を引きますと11名いましたので、分母を44名としまして、44分の 1 足す11足す12をしまして、持病と同じ種類の死亡原因で亡くなった方という方が54.5%、持病と死亡原因が同じ方が54.5%いました。つまり、ここも、ここは半数、50%ぐらいで、こちら、こちらも50%ぐらいいたということになります。

ここからは医師の死因につながるかもしれないし、つながらないかもしれない持病と同一種の死因につながる持病、つながらない持病があるのではないかなと思っております。こちらが、ICD-10 に基づいて持病ありに注目した結果となります。

続きまして、FTA を使います。関連死発生プロセスにおける持病の位置づけです。こちら、循環器系疾患が望ましくない持病、望ましくない死亡原因と置きました。循環器系疾患を今回は例に例えます。

循環器系疾患における死亡は、血圧上昇と血栓傾向に分かれます。こちらを AND ゲートでつなぎました。血圧上昇の下を見ていくと、疾患の影響、地震への恐怖、薬の不足、寝具がない、栄養の偏り。じゃあどれか一方が来て血圧上昇につながります。血栓傾向のほうを見ると、疾患の影響、下肢の外傷、水分不足、活動量の低下、身体の冷え。活動量の低下の下に、長時間座っている、長期臥床というものがきています。

こちら全て AND ゲートでつなぎました。

ここに持病がどういう関わりがあるのかなということを考えますと、疾患の影響、地震への恐怖、ここは持病との関連性があるな。例えば高血圧や精神疾患などが関わってくるなと考えております。血栓傾向の下の疾患の影響には、持病との関連性あり、糖尿病などが関わってくるのではないか。そして、活動量の低下の下の長時間座位、長期臥床というのは、持病との関連性があると。脊柱管狭窄症が関係してくるのではないかということを考えております。循環器系疾患による死亡と各事象との因果関係が把握できました。持病が関連し得る基本事象というものを明確にすることができました。

続きまして、熊本市では実際にどうなっていたのか、具体的に見ていこうと思います。

まず、一例挙げますと、死亡原因、急性心筋梗塞で亡くなった方はどういう持病を持っていたのかといいますと、高血圧、糖尿病、心臓病を患っておりました。心臓病に関しては ICD-10 に記載がないため、今回は高血圧、糖尿病を例に見ていきます。

先ほど見ていった心筋梗塞による死亡の FTA 図を例にすると、こちら、疾患の影響における高血圧、こちら、疾患の影響、糖尿病、血栓傾向の疾患の影響に関するのは糖尿病が関わってくるのではないかと考えております。熊本市の実際の事例でも、高血圧、糖尿病が死亡原因に関わっている可能性が見いだせました。

では、持病との関連性なんですけれども、持病との関連性といいますと、その背景には 2 つあると思っております。 1 つ目、持病そのもの、 2 つ目、持病の悪化、これが関係してくると思っております。

じゃあ、持病そのものって何なのか。こちら見ていただきますと、長時間座位、長期臥床、持病との関連性あり、脊柱管狭窄症と申し上げましたが、持病そのものといいますと、これは、脊柱管狭窄症というのは、脊髄が圧迫されて腰の痛み、足のしびれを起こす病気になります。これなんですけれども、ふだん入院をしておりまして、この病気が原因で入院をしておりまして、なんですけれども、地震が起きて、そうすると、介護士さんであったり、付添いの人がその対応ができ

なくなり、その病人をもう対応できないからといってそのままにしておくと、長時間座位、長期間座ったり、長時間寝たりというものが原因となり、活動量が低下につながり、血栓傾向、血栓ができやすくなる傾向が起こり、心筋梗塞につながって亡くなってしまうよという流れになります。

持病の悪化に関してですが、持病の悪化、例えば高血圧、こちら見ていただきます。高血圧、糖尿病がございます。高血圧、糖尿病ですが、災害に伴う環境の悪化、そして平時の予防策の不徹底というもの、この２つが上げられると考えております。災害に伴う環境の悪化と平時の予防策の不徹底により持病が悪化し、持病との関連性がある、そして心筋梗塞による死亡につながっていくと考えております。

持病そのものが影響する場合、そして、持病が悪化することが影響する場合があると考えられます。

持病保有者については、平時からの持病対策に加えて、災害時だからこそ備えなければならない特別な対策がないか確認していくことも重要だと感じております。

では、結論です。

持病と関連死の関係。熊本市では、関連死で亡くなった方の67％が持病ありでした。持病あり患者のうち、持病と同じ種類の疾患で亡くなった方、別の種類での疾患で亡くなった方は、それぞれ54.5％、45.5％、半々でした。

２つ目、関連死発生過程における持病の位置づけ。心筋梗塞に伴う関連死発生プロセスにおいて、持病がどこに関係しているのか明らかにすることができました。具体的には、血圧上昇の要因になり得る疾患の影響、地震への恐怖、そして、血栓傾向の要因になり得る疾患の影響、活動量の低下です。

関連死発生の FTA 図の有用性は、どの種類の関連死に対しても、発生プロセスの中のどこに持病が関係するのかを明確にすることができ、その対策を検討できるようになる点が FTA 図の有用性です。関連死発生に持病がどう関わってくるのか、さらに分析を深める必要はございます。持病保有者について、平時からの持病対策に加えて、災害時だからこそ備えなければならない特別な対策がないか確認していくことも求められます。

じゃあ、最後に、阪神・淡路大震災の教訓を振り返る。何が要るのかということで、ここまで持病と関連死との関係を見てきました。持病と関連死の関係を高血圧の観点から、平常時と災害時とを比較し考察していきたいと思います。

まず、平常時。厚労省の国民健康栄養調査からデータを得たところ、高血圧症ありの人が平常時60％でした。高血圧なしの方はこちら。災害時になるとどうなるのか。熊本市災害弔慰金支給審査委員会から見ていくと、20％の人が高血圧をもって亡くなっております。平常時では60％ですが、災害時だと20％にぐっと減っている。この関係が見いだされました。つまり持病として高血圧を有する人は、災害時にも持病の変化にうまく対処できている可能性があります。災害時の体調の変化にうまく対処できていない人々の特徴については、持病という視点も含め、さらに分析を深める必要がございます。

では、私が思う教訓とは、阪神・淡路大震災の教訓とは何だろう、こう考えますと、今改めて何が問題だったかを問い直すことが教訓だと感じております。

私は、有持病者、持病ありの人は、災害時に亡くなりやすいんじゃないかという私の考え、勝手な思い込みだったんですけれども、研究をしていくうちに、ふだんから持病と向き合っているからこそ災害時にもうまく対応できる有持病者もいるのではないかということを示唆するものでした。

では、そのような有持病者の方、持病ありの方が命を落とす場合があるとするのであれば、それはどのような場合なのか。災害時に命を落としやすい有持病者、持病を持っている方とはどのような方々なのかというものを知ってみたいなと思っております。

阪神・淡路大震災では、これらの問題はどのように認識されたのか。阪神・淡路大震災では、持病ありの人、持病なしの人がそれぞれ検証されていたのかすらまだ調べておりませんが、していたのかというものをはじめ、その後どのような教訓が導出されていたのか。誰がその教訓を使って、熊本地震における熊本市の有持病者の犠牲がどれだけ軽減されたのか。その後の災害において、熊本市だけではなく、東日本大震災でも、どのように教訓が生かされたのか、さらに分析を進めたいと思っております。さらに、2000年代、我が国の医療体制は大きく変化しました。当時の教訓がそのまま現在にも通用するとは限りません。

では、ここで、最後に、今改めて何が問題だったのかを問い直すこと。問題を問い直すことをしなければならないと私は思っております。

兵庫県立大学
防災リーダー教育プログラム

あまおだ減災フェス
～地域の防災力向上のために～

あまおだ減災フェスとは？

尼崎小田高校が地域防災活動の「HUB」となって、地域の皆さんと防災・減災について考えるイベント

地域防災力向上に学校が貢献するには、自らの危機管理体制、教員の危機管理意識向上が必要

防災・減災対策だけではなく、平常時からの繋がり(絆)が必要不可欠

学校(生徒)と地域住民がWin-Winになる連携を作るための包括的な仕掛けを作る

地域のことはみんなで考えよう！

防災・減災を楽しく学ぼう！

自衛隊の方が来てくれて
ひもの結び方を教えてくれました！

AEDの使い方を学び中

神戸発防災音楽ユニットBloom Worksとコラボ

大学生と高校生がお二人とトークショー

イベントの最後にみんなで大合唱

どちらも盛り上がって楽しみました！

視界を塞いで障害物を避けて進むのは大変

上手く火を消せるかな？

毎回参加者の皆さんにコメントを書いてもらってメモリアルを作成

今回は木に花を咲かせました！

○**兵庫県立大学１**　それでは、兵庫県立尼崎小田高等学校と兵庫県立大学から、「あまおだ減災フェス　地域の防災力向上のために」ということで発表させていただきます。

まず、兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムについて紹介させていただきます。

これは、兵庫県立大学全学部生を対象としたプログラムで、一学年30人程度です。あらゆる学部から集まってます。そして、これは、防災リーダーとしての知識や災害現場などでの実践力やコミュニケーション力を身につけるために、様々な講義や活動を行っています。拠点は、人と防災未来センターでやってます。

次に、11月27日土曜日で開催した「あまおだ減災フェス」について説明させていただきます。

まず、このイベントなんですけど、兵庫県立尼崎小田高校が地域防災活動のハブとなって、地域の皆さんと防災・減災について考えるイベントになっています。そして、私たち兵庫県立大学はイベントのサポーターをやらせていただきました。

このように、あらゆる世代の方々と防災・減災を楽しく学び、地域のことはみんなで考えようという取組になっています。

それでは、2021年度の報告をさせていただきます。

まず、今回は４回目の開催であって、初めての、尼崎小田高校の外に飛び出して、尼崎市にある小田南生涯学習プラザというところで開催させていただきました。一般来場者数は200人で、参加団体は12団体ほどです。

これが参加団体一覧なんですけども、尼崎小田高校、兵庫県立大学のほかにも、尼崎の市役所の方や自衛隊の方、様々な中学校、高校、大学の方に参加していただきました。そして、イベントの最後には、Bloom Works さんにライブステージ、合唱を行っていただきました。

その中で、まず、兵庫県立大学で企画した脱出ゲームというものについて説明させていただきます。

まず、脱出ゲーム、名前のとおり部屋から脱出するものなんですけども、その小田南生涯学習プラザというところの一室をお借りして脱出ゲームを行いました。

まず、企画内容として、その部屋を薄暗くして障害物を設置しました。このように、ベルトパーティションという赤いひものようなものだったり、椅子とか机を使って障害物を設置しました。そして、入ってもらう前に、参加者にはさいころを振ってもらいます。そして、出た目に応じてハンデを負ってもらいました。例えば車椅子を使って歩けないっていう状態にしたり、片腕が使えないように腕を固定したりしました。そして、最後にアイマスクをつけてもらって、目が見えないようにしてもらって、補助の方と共にゴールを目指してもらいました。このように二人一組で参加してもらって、一人はさいころ振ってハンデを負ってもらう、もう一人はそれを補助して、一緒に脱出してもらうというゲームになっています。

企画の意図としては、災害発生時に建物などが倒壊して、道が障害物で塞がれているかもしれないということ、また、災害でけがを負うことがあるかもしれないということから、避難はけがをした人、手助けする

人、どちらも大変です。そのために、補助の方とハンデを負ってもらう方、二人で参加してもらいました。

こちらがその様子です。ヘルメットをかぶってる方が、こちらがハンデを負ってもらった方です。アイマスクをしてるので目は見えません。その中で、このもう一人、青い服を着ている補助の方が、目の前に今、ベルトパーティションがあるから危ないとか、前が見えないので道を誘導してもらってます。このようにして、しゃがんでくださいとかいって、一緒に手を引いて歩いてもらっています。

こちらも、目が見えないので、ヘルメットをかぶった方が手でどこに何があるかとか、机とかを触って、今、自分がどこにいるかを確認しています。

こちらは車椅子のハンデを負ってもらったんですけども、このようにしゃがんでもらって、ぶつからないように進んでもらいました。

これは、もうベルトパーティションを通り過ぎてるんですけども、まだ頭をしゃがめていて、これは補助の方に、もういいよっていう声かけをしてもらいます。以上です。

○**兵庫県立大学２**　次に、兵庫県立大学が企画した防災食の企画について説明させていただきます。

この企画では、カレー味、ワカメご飯味、五目ご飯、白米の４種類のアルファ米の非常食を実際に試食してもらい、白米を除いたカレー、ワカメ、五目の中で一番よいと思った味に投票していただくという企画でした。

投票結果は、五目が58票、カレーが29票、ワカメが15票となっており、五目が一番多いという結果になりました。五目が一番おいしいという意見が多かったのですが、五目が一番おいしいけど、長期間、これを何度も食べていくのだったら、ワカメがいいなど、いろいろな意見が出ました。以上です。

○**兵庫県立大学３**　次に、携帯カード作りについて説明させていただきます。

こちら、実物をちょっと今日持ってきたんですけど、あまりちょっとよく見えないんですけど、このような見た目で、中には氏名や住所、生年月日、性別、血液型、勤務先、学校名や緊急連絡先や、自分が行くべき避難場所だったり、あと、メモもできるコーナーやチェックリストなどが書かれています。このカードを日頃からかばんなどに携帯してもらうことで、緊急時に自分の身に何か起こったときに、その場にいた人がすぐに対応できるようにという意味を込めて、このカードを制作しました。

また、左下のように、カラフルな見た目のものを制作しました。このカラフルな見た目によって、その場にいた女子高生だったりが興味を持ってくれたり、ま

た、右下の写真にもあるように、マスキングテープや、このようにデコレーションできるシールを置いていたので、小さなお子さんにも興味を持ってもらうことができました。

また、小田南プラザ周辺のハザードマップを置いて、自分の家がどこにあって、自分の家にはどのような被害が起こる可能性があるのかっていうことも確認してもらいました。

こちらの写真が制作の様子です。反省点としては、そのカードの中に振り仮名をつけていなかったので、読むときに、お子さんだったり、また、知らない人がすぐに読むことができないっていうことと、小田南プラザ周辺に住んでいない人も結構おられて、その地図を見ていたときに、ああ、自分の家ないなっていう人も結構いたので、範囲を広げていたらよかったなと思いました。

この携帯カード作りを通じて、地元の人や高校生など、多くの世代の人たちと交流ができたのでよかったです。これで終わります。

○兵庫県立大学４　続いて、救急体験のブースについて説明させていただきます。救急体験のブースでは、骨折したときの対処法の紹介や、あと AED を実際に使ってみるということをしました。

これは、尼崎小田高校の保健委員会と兵庫県立大学の看護学部のサークルの LST、ライフサポートチームに来ていただいて、そこで共同でブースをつくっていただきました。

これが実際の様子なんですけど、ちょっと今、AED は使ってないんですけど、人工呼吸だったり、心臓マッサージだったりの様子を実際に、左側の赤い方が LST のメンバーなんですけど、その人から教えてもらったりしました。小さい子供さんたちにも一生懸命聞いていただいたので、やってよかったなっていう感想をいただいたのでよかったです。

続いて、神戸発防災音楽ユニット、Bloom Works さんとのコラボということで、Bloom Works さんなんですけど、日本のボイスパーカッションのパイオニアであって、当大学の大学院の減災復興政策研究科を卒業された KAZZ さんと、あと、シンガーソングライターで、防災士とひょうご防災リーダーを取得されている石田裕之さんのお二人がユニットを組まれて、防災を音楽で伝えるっていう活動をされているのが Bloom Works さんっていうユニットで、そのお二人に来ていただいて、トークショーを行いました。

この下の写真がそのトークショーのときの様子なんですけど、これは小田南生涯学習プラザのほうじゃなくて、あまがさきキューズモールのキューズパークっていう広場のほうでさせていただきました。すごい寒い中だったんですけど、大学生も高校生も Bloom Works のお二人もすごい一生懸命話ししていただいたので、多くの人に聞いていただいたと思います。

イベントの最後で、Bloom Works さんのライブを行ったんですけど、これがお二人のときの様子で、ライブのラストで、高校生と大学生も入って大合唱ということで、「Bloomin'」と「ツナガリズム」という曲を合唱させていただきました。この合唱なんですけど、インドネシアのシムル島で昔に地震があって、それを伝承させるために、歌という形で伝承をさせているっていうことがあって、それを Bloom Works のお二人が聞いて、自分たちもこういう感じで歌にして、100年先でもその伝承が続くようにということをしたいということで、そういう曲作りを Bloom Works のお二人がやっていて、僕たちもその曲を歌わせていただいたという感じになっています。

毎回、花をモチーフにしたメモリアルを作成しているんですけど、この右の写真は第３回目のときのメモリアルなんですけど、来ていただいた方たちにコメントをこの花びらに書いていただいて、その花びらを貼っていって、大きな花を作ろうということで、その回を記念するものを何か作ろうということで、毎回行っております。今年はこういうふうに桜の木に花が咲いたという感じで、すごいいっぱいコメントも書いていただいてよかったなというふうに思っています。

来場者の方にアンケートを行って、どこがよかったですかっていうことを聞いたんですけど、災害について忘れないということが大切だと思うので、このような活動は、地道なように思われますがとても大切なことであるし、助け合える関係づくりにつながると思います。このような取組を行い、いざというときに助け合いの精神を共有し合うこと自体が、本当にいざというときに役立つものだと考えます。防災について考えるきっかけになります、今後も継続していただけたら、定期的に自分の防災について見詰め直す機会になる。このようなイベントで高校生や大学生と関わりがあると、いざというときに制服などを見て判断できる、そこから声かけにつながるきっかけになったりすると思うっていう感じで、いっぱいイベントについてコメントをしていただいて、僕たち自身も、最後合唱したりして、イベントが楽しいっていうことをすごい感じれたので、災害の怖さとかっていうのは、もちろん甚大な被害もたらすんだよっていうことを、怖いっていうことを伝えることは大事だと思うんですけど、こういう対策、災害に対して対応していくっていうところで、こういうふうに楽しんで、こう何か伝えていったら、それが一つ、防災について考えようっていうきっかけになるんじゃないかなっていうふうに、このイベントを通じて僕たちも思いました。

最後に、写真撮影ということで、Bloom Works とそれぞれの高校と大学で写真を撮りました。

続いては、兵庫県立尼崎小田高等学校の看護医療・健康類型のお二人から発表させていただきます。

○尼崎小田高等学校１　兵庫県立尼崎小田高等学校の看護医療・健康類型の砂川と奥村です。

本校がある尼崎市小田地区は海抜ゼロメートル地帯にあります。３人に１人が65歳以上の高齢者で独り暮らしが多いことから、災害が起こった際に大きな被害を被る可能性があります。また、高齢者だけではなく、災害時に特別な配慮が必要な災害時要配慮者と呼ばれる方の命が失われる可能性が大きいと言えます。第３期尼崎市地域福祉計画によると、地域住民同士、交流のない人が増えており、挨拶程度でしか関わりがないという実態があります。また、ボランティア活動などの地域の支え合い活動に参加している人は10％強と少なく、このままでは災害時には助かる命も助からない

という危機感を持ちました。そこで、私たち高校生に何かできることはないのだろうかと考え、この取組を行うことにしました。

災害は、自然現象が社会の弱さと出会うと起きるという言葉があります。災害時にその社会、地域にもともとあった問題が表に出てきて、その社会、地域の弱いところがより大変になります。災害の被害をなくすことはできませんが、少なくすることはできます。地域の防災力を高めていくことで、災害の被害を少なくすることができるのです。そこで、地域の防災力を高める手段として、私たちの高校生がハブになり、人と人とが平時よりつながり、いざというときに助け合える関係づくりをしようと、平成26年度から取り組んでいます。キーワードは地域コミュニティーづくりです。

看護医療・健康類型は、３つのグループに分かれて活動しています。先ほど述べたように、防災・減災班から始めた地域コミュニティーづくりですが、今ではSDGs の取組を意識しながら、在宅医療班、子どもの居場所づくり班も加わり、３つの班が地域コミュニティーづくりに取り組んでいます。

まずは、今年度の防災・減災班についての地域コミュニティーづくりについて説明します。

まずは、尼崎市要配慮者見守り・支え合い事業です。この事業は本校と尼崎市とで協定を結び、実施しています。尼崎市の避難行動要支援者名簿に登録されている65歳以上の高齢者の自宅を訪問し、孤立しがちな高齢者と私たちが日頃から顔の見える関係づくりを行うことが目的です。これらの写真は、実際に避難行動要支援者名簿に登録されている高齢者のご自宅に民生児童委員の方と訪問し、お話をしている場面です。コロナ禍で家族や友人と会う機会、話す機会が減り、地域のつながりも減っている中で、高校生が来てくれて元気が出た、いつでも時間があるときは来てほしいとのうれしい声を聞きました。もう75歳やし、独りなので、いつ死んでもいいと言われた方に、人とつながることの楽しさを味わっていただき、生きる希望を持っていただくことができるように、今後も訪問しようと思いました。

そして、12月には、小学校へ訪問し、防災出前授業を行いました。段ボールベッドやトイレの使い方、毛布担架や三角巾の使い方の講習だけではなく、阪神・淡路大震災の被災体験を、私たち被災経験のない高校生が被災者から聞き、小学生に語り継ぐということを初めて行いました。また、避難行動要支援者名簿の存在を知らないおじいちゃん、おばあちゃんのために、孫として、君たちがおじいちゃん、おばあちゃんに伝えてほしいということも述べました。今月の23日には、災害時要配慮者について、自助、共助、ご近所の大切さを伝える劇を上演する予定です。

○尼崎小田高等学校２　次に、在宅療養班の地域コミュニティーづくりについてです。尼崎市では、高齢者や住民と交流のない層が増えて、地域のつながりの希薄化が進んでいます。人とのつながりの有無によって認知症や寿命などにも大きな影響を及ぼすことから、人と人とがつながること、いわゆる地域コミュニティーづくりの大切さを実感し、減災班とコラボレーション

しながら、防災福祉のまちづくりに取り組みました。

10月に実施した、みんなで楽しく健康にのイベントでは、医師監修のフレイル予防体操や、スポーツスタッキング、小田地区ふれあいサロン実施場所マップの展示、紹介などを行いました。最後に、この10月のイベントでは30名弱の高齢者にお越しいただきました。今月の23日には、地域ケアシステムの構築と多職種連携により、住み慣れた自宅での在宅療養が可能であることを地域住民に知らせる劇を行います。その際に、在宅療養が進むと、災害時に亡くなる高齢者の方が多くなるという東日本大震災のときの宮城県の事例があるので、避難行動要支援者名簿の登録の呼びかけを行います。また、３月にも在宅療養ワークショップという市民向けのイベントを行います。

最後に、子どもの居場所づくり班の地域コミュニティーづくりについてです。子供が楽しめる場所をつくり、子供同士、子供と大人がつながれる空間をつくろう、また、子供の居場所づくりの場である子供食堂を支援しようと考え、イベントを行いました。

まず、２つのイベントを行いました。第１は小田夏祭りです。小さな子供が楽しめる遊びとともに、防災お菓子ポシェット作りや防災人間すごろくなど、防災・減災の取組を取り入れました。保護者を含め600名の参加があり、大盛況に終わりました。第２は、地元商店街の活性化という意味も込めて、子供向けに、火を使わないお菓子作りを行い、親子共々楽しんでおられました。

子供食堂の支援についてですが、募金活動を行い、寄せられた募金75万円を子供食堂に持参しました。出会い、つながりは笑顔の源です。子供を中心に人と人とがつながれる場所、空間づくりに、今後も取り組んでいきたいです。

2016年度から行ってきたこの活動は、継続が力となり、私たちの活動によって、平素から人と人とがつながれることの大切さが地域住民に広がっていて、安心、安全なまちづくりに貢献しているのではないかと思っております。今年度から、在宅療養班や子どもの居場所班、３年生のボランティア実践、２年生の探求応用においても、地域コミュニティーづくりに取組、地域社会に私たちの活動が浸透していることを肌で感じることができました。

来年度に向けて、以下の３つのことに取り組みたいと思います。第１に、防災・減災活動を全校生に広めていくために、全校生向けによる類型制の授業です。第２に、地域住民、これは災害時要配慮者の方も参加する地域防災訓練の実施です。そして、第３に、高校生と NPO 法人、企業のコラボによる地域コミュニティーづくりです。高校生の今後の活動にご期待ください。

発表は以上です。ありがとうございました。

パネルディスカッション

テーマ：わたしたちが「聴く」ことって・・・

【コーディネーター】
●京都大学 防災研究所 助教　中野　元太さん
●人と防災未来センター 研究部 研究員　林田　怜菜さん
【グラフィックファシリテーション】
●株式会社たがやす　出村　沙代さん
●大阪防災プロジェクト共同代表　多田　裕亮さん
【パネリスト】
●兵庫県立舞子高等学校　大﨑きらりさん
●兵庫県立明石南高等学校　宮定　夢実さん
●滋賀県立彦根東高等学校　加藤　煌理さん
●国立明石工業高等専門学校
D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム
D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム
藤田　裕さん
●神戸学院大学
現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
クローズアップ社会研究会　北村　昌卓さん
●関西大学　山﨑　健司さん
●兵庫県立大学　仁木　貴之さん

○**司会**　それでは、時間になりましたので、後半のパネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。

タイトルとしましては、「わたしたちが「聴く」ことって・・・」という形になります。

このパネルディスカッションの趣旨になりますけれども、未災者から未災者へと語り継ぐこと目指す災害メモリアルアクション KOBE。未災者が語り継ぐとき、まず震災を聞くことから始めることになります。体験者に聞く、身近な先生に聞く、過去の記録に聞く、さらに社会に聞く。様々な「聴く」スタイルを実践するメモリアルアクションの学生たちにとって、「聴く」とは何だろうかと。未災者の「聴く」を語り合っていきたいというふうに思います。

この時間は、ご視聴いただいている皆様にもぜひ、今お話しした内容を意識していただき、今後の語り継ぎの在り方について考えていただく機会にしていただければというふうに思っております。

それでは、パネルディスカッションの出演者をご紹介させていただきます。まずは、コーディネーターを担当していただきます京都大学防災研究所助教、中野元太先生、それと、人と防災未来センター研究部の林田怜菜さんです。

次に、パネリストのほうもご紹介させていただきたいと思います。まずは、兵庫県立舞子高等学校の大﨑きらりさん。それと、兵庫県立明石南高等学校の宮定夢実さん。滋賀県立彦根東高等学校の加藤煌理さん。国立明石工業高等専門学校、明石高専の藤田裕さん。神戸学院大学の北村昌卓さん。関西大学の山﨑健司さん。そして、最後に、兵庫県立大学の仁木貴之さんです。

あと、今、このパネルディスカッションのほうをイラストレーターの方々に描いていただいてるというような形になっていますので、グラフィック担当の方をご紹介させていただきたいというふうに思います。グラフィックファシリテーションを担当していただいております株式会社たがやすの出村沙代様と滋賀県立大学の多田裕亮さんです。

○**多田さん**　よろしくお願いします。

○**出村さん**　よろしくお願いします。

○**司会**　お願いします。

それでは、ここからの進行は、コーディネーターを担当してくださる中野先生と林田さんにお願いしたいと思います。ご準備のほう、よろしいでしょうか。

○**中野コーディネーター**　分かりました。取りあえずパネルディスカッションのほうを始めたいと思います。それでは、このパネルディスカッション、私、中野と、もう一人、人と防災未来センターの林田さんのほうで進行をさせていただきたいと思います。

司会の方からも紹介ありましたとおり、このパネルディスカッション、テーマが、「わたしたちが「聴く」ことって・・・」というふうになってるんですね。何でこういうテーマに選んだかといいますと、やっぱり災害メモリアルアクション KOBE、この取組は、これまで震災を体験していない方が、震災を体験していない人に伝えていくというときには、まず、体験していないので、誰かから聞いたりとかするっていうことが必要になってくるわけですね。誰かに聞くことっていうのは、必ずしも震災を体験した人の目の前に行って、その人に直接聞くっていうことだけではなくて、もちろん様々なデータから聞く、あるいは社会の声、選挙等からも聞く、様々な「聴く」っていう実践があるわけですね。

今日の皆さんの取組の発表、本当に感動いたしました。今日、ご参加者リストを見ると、高校、大学から約50人の生徒さんが参加をしてくださっていて、この50人の方が本当いろんなところで震災のことを聞いたり、そして、社会に還元していくっていう取組をされてるんだなあと、それを何年もこの取組続けてるわけですから、本当に大きな力になっていってるんだなっていうことを改めて感じていたところです。

今日は時間も限られていますし、ご登壇いただいてる方も７団体ということで多いので、まず最初に、１つ目の質問をさせていただいて、ウオーミングアップ

としたいなというふうに思います。

皆さんに最初に伺いたいことっていうのは、もちろん「聴く」にはいろんな方法があって、舞子高校さんのように、どちらかというと近いところ、身近なところにいる人に聞くっていうこともあれば、あるいはいろんなショッピングセンターとか、高齢者施設に出向いて聞いた人たちもいて、でも、それってやっぱり一度きりの出会いかなというふうにも思うんですよね。あるいはゲームを一緒にプレーして聞くということもあっただろうし、それからゲームを作っていくという課程で、何かを調べる、これも昔のデータ調べていくことによって、何か体験を聞いていくっていくことだと思います。さらには水害の被災地に出向いていって、災害エスノグラフィーという形で聞くということもあったし、震災の関連死ということから、データから聞くということもありました。

その中で、これ、皆さんに同じ質問をしようと思うんですね。聞いて心に響いたこと、聞いて心に残った言葉っていうのは何かあったかなということを、まず最初、1週目、やってみたいなというふうに思います。それでは、順番に行きたいと思います。発表の順番で行きましょうか。

じゃあ、最初、舞子高校の大﨑さん、いかがでしょうか。

○大﨑さん　舞子高校の大﨑です。お願いします。

私は外部講師の方や学校の授業で、阪神・淡路大震災で体験したこと以外にも、その後の復旧や復興の話を聞かせていただく機会が多くあります。そのときに、復旧や復興が進んでいく中で、少数派の立場だった人の声とか、また、今のまちからは見えない声、たった一人の小さな声、その声の存在に気づくことができました。そこで、私たちはそういった小さな見えない声にも耳を傾ける、視野をもっと広げる必要があるなっていうのを考えさせられました。以上です。

○中野コーディネーター　ありがとうございます。例えば、その見えない声っていうのは、どんなものが大﨑さんにとっては見えない声だったんですか、どういうことがありましたか。

○大﨑さん　例えば阪神・淡路大震災が起こった後に、新しい公園ができるってなって、そのときに、公園がここに造られるから、ちょっと住んでいる家をどかなければいけないってなったんですね。それで、でも、新しい公園が今はできてるけど、もともとはそこに住んでた人がいるんだよっていう、そういう声だったりです。

○中野コーディネーター　ああ、なるほど。そうですよね、今、公園ができた後のまちからは、やっぱりそこにはもともと、そこに住んでた方たちの生活があっていうのが見えなくなってるけれども、そういうことに改めて気づかされたということですよね。

○大﨑さん　はい。

○中野コーディネーター　ありがとうございます。

それでは、明石南高校の宮定さん。8代目ですよね、宮定さんは、8代目リーダーだと思いますけども、いかがでしょうか。

○宮定さん　明石南高校の宮定です。よろしくお願いします。

まず、私たちはキクっていうのを3種類考えてて、まず1つ目のキクっていうのが、まず、相手の話を「聞く」っていう「聞く」なんですけど、この「聞く」は、相手から言ってもらう、語りかけてもらうことを指してる聞くっていうことを考えていて、2つ目は、自分から「訊く」っていうこの「訊く」なんですけど、このキクは、自ら尋ねることを指しているキクっていうことと考えていて、3つ目が、私たちが一番考えているキクのことなんですけど、こういう「効く・利く」っていう漢字を書くんですけど、この「効く・利く」は、自分から行動をして、周りに影響をするということを指していて、影響するということは相手に届いているということになるので、自分から質問をしなくても、相手に届いていれば、自ら相手が話をしてくださるので、私たちはこれを目指して日々活動に取り組んでいます。

○中野コーディネーター　なるほど。はい、どうぞ。

○宮定さん　そして、日々活動してきた中で、私たちは自作のゲームがあるんですけど、その自作のゲームをし終わった後とかに、阪神・淡路大震災のことを話してくださるので、そういうことがつながっているのかなと思います。

○中野コーディネーター　なるほど、ありがとうございます。その3種類のキクは、誰のアイデアなんですか。どういう皆さんの中での話合いで、この3種類のキクっていうのが出てきたんですかね。

○宮定さん　この3種類のキクは、まず、この「聞く」が一番親しみやすいというか、なじみがあると思うんですけど、この「聞く」とこっちの「訊く」、あまりこの訊くが分からないと、なじみがないと思うんですけど、この「訊く」っていうのを、まず、相手から言ってもらうっていうさっきの「聞く」はこっちで、自分から尋ねることっていうのはどうしたらいいんだろうって考えたときに、この「訊く」が出てきて。

○中野コーディネーター　なるほど、なるほど。

○宮定さん　私たちが一番大事にしていることは何だろ

うって考えたときに出てきたのが、こっちのキクで、私たちは地域でたくさんの活動をしているので、そういう機会を改めて振り返ったときに、自ら話してくださることが多いなと思って、このキクにしました、3種類にしました。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。やっぱり活動を日々していく中で、単に聞くだけではなくて、誰かにしっかり届けたいと、それが何かの役に立ちたいというような「聴く」を一生懸命実践されてるんだというようなことですよね。分かりました、ありがとうございます。

　じゃあ、続きまして、彦根東の加藤さん、よろしくお願いします。

○**加藤さん**　彦根東高校の新聞部の加藤です。よろしくお願いします。

　早速なんですけれども、僕はいろんな方に取材させていただいて聞いている話の中で、一番心に残った言葉は、福島の取材に行かせていただいたときに、ニュースとか記事っていうのは、どこかを切り取らなければ伝えることができない、福島は多面体だという言葉を、「福島をつなぐ」が始まったきっかけでもある相馬高校さんの出版局の新聞、当時顧問をされていた武内先生という方の言葉なんですけども、その武内先生が福島が多面体だという言葉をおっしゃっていまして、実際、僕もスクールメディアとして、記事っていうものを書いている者として、その言葉がやっぱりすごい心に残っていて、先ほどの活動発表のパワーポイントでも使ったほど、私たちの部員の心の中にはすごい心に残っている言葉なのかなと思っていて、僕自身、福島は多面体だっていうのは、やっぱり発表活動の場でも申しましたとおり、実際、震災の当時、自分がどこにいたかであったりとか、どういう状況にあったりとか、そういったところで人々の心情が変わっていったり、被害の度合いによって、実際心に残っている度合い私たちにとって10年というのは非常に長い時間なので、実際、僕たちぐらいの世代がどういうふうな心に、印象に残していたりとか、そういったいろんな、十人十色ですよね、やっぱり人々の思いっていうのは。なので、そこが全て伝えることができない、そういった人たちに、ひとえに一まとめに言葉にすることができないっていう意味での多面体だと僕は捉えているので、そういったものがすごい心に残りました。

○**中野コーディネーター**　なるほど。本当に話を福島で聞く中で、どこかの部分を切り取るっていうことは、どこかの部分がやっぱり伝えらないっていうことになりますよね。だからこそ、本当に体験っていうのは多面的なんだっていうふうに感じたと思うんですけれども、どこの部分が、加藤さんにとっては何かうまく伝わってないなと、うまく人に届いてない、うまく人に聞かれていないなと思った、そういうポイントってありましたか。

○**加藤さん**　そうですね。何かを話してるわけじゃないんですけれども、やっぱり復興の度合いであったりとか、そういったものは現地に行ってじゃないと分からないと思っているので、それに、震災といえば、被害に遭った人がかわいそうっていうイメージを持たれている方も一定数いると思うので、そういった方に、真実なんて大それたことは言えないですけれども、事実としてありのままを伝えることは、やっぱりどうしても十分ではないのかなと思います。

○**中野コーディネーター**　なるほど、なるほど、ありがとうございます。

　では、続きまして、明石高専の藤田さん、地域連携班ですね、よろしくお願いします。

○**藤田さん**　明石高専、D-PRO135°の藤田です。私が聞くことっていうので一番心に残ったっていうのが、2020年、おととしになるんですかね、おととしの夏頃に、当時、阪神・淡路大震災のときに、鷹取中学校で教師されてた中溝さんという方にインタビューという形でお話聞かせていただいて、そのときとか、あとは、自分たちで防災ゲームっていうものを作っていて、その防災ゲームっていうのを実際にいろんなイベントだったりとか、学校に持っていたりっていうことがあるんですけど、そういうときに、ゲームをした後にお声かけいただくことで、その言葉の中に入ってる言葉、何だろうな、単語っていうので一番聞くのが、心っていう単語をよく聞くんですね。

　例えば避難所の運営されてた中溝さんから聞いた言葉だと、避難所運営のときにマニュアルというものが阪神・淡路大震災のときなくて、自分が一番避難所運営で心がけてたのが、避難者の人に誠心誠意対応するというところで心がけていたっていうふうにお話を聞いて、実際に避難されてる方、避難してきた方、災害を経験された方にお話を聞くっていうときにも、やっぱりこういうところが困ったとか、こういうところを助けてもらってうれしかったとか、そういう気持ちの部分でいろんなお話をしてくださる方が多くて、やっぱりシステムとか、何か決まったものっていうのは、災害のときにやっぱり壊れちゃうものだったりとか、もともとないものだったりとかってすると思うんですね。そういうシステムとか仕組みっていうのがないところで、じゃあ、どうしていけばいいのかなっていう

ので、やっぱり相手の気持ちを考えるっていう、すごい当たり前のことなんですけど、そういう気持ちとか心っていうのがすごいキーになる言葉なんじゃないかなっていうふうに思いました。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。本当に様々なところに心が、気持ちが登場するっていうことですけれども、藤田さんが地域連携班として、ゲームを通して、やっぱりその心を伝えていこうということもされてると思うんですけれども、何かどういうところに工夫があったりするとかってありますか。

○**藤田さん**　やっぱりゲームの中で、単純な知識もそうなんですけど、考え方、実際に災害が起こったときに、じゃあ、どうやっていけばいいのかとか、どうしていけばいいのかっていう考え方とか、仕組みだけじゃない、いろんなところに応用できるような考え方とか心の持ち方っていうのが伝えられるようなゲームにしたいなと考えて、今までのゲーム作りでもそういうふうにしていっています。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　では、続きまして、神戸学院大学の北村さん、よろしくお願いします。北村さんは安富ゼミのグループのほうですよね。

○**北村さん**　そうです。

○**中野コーディネーター**　はい、お願いします。

○**北村さん**　私は個人的にもいろいろお話を阪神・淡路大震災の被災者であったりとか、あるいは私の母や父、家族の者も被災してますんで、いろんな経験とか、あるいは、今回安富ゼミでは、聞き書きということで、いろんな被災者の方にお話を伺ったりしてきました。

　そんな中で、非常にいろいろな経験を聞いたりしてる中で思うのが、かなり様々な方が、災害を受けたときの印象がすごい無念だったとか、あるいはそういう、何かこう、せっかく準備してきたとは思っていたけれども、実際にはできてなかったんだなっていう後悔の思いとか、そういうのが多かったんですね。というのも、私たちっていうか、防災をやってる者以外でも、災害に対して備えなければいけないとか、口だけで言うのには結構簡単やと思いますし、実際に備えなあかんなというふうな意識は多分持ってるとは思うんですけども、実際に被災された方のお話を伺ってると、かなりそのことが重みが出てくるといいますか、例えば今回の安富ゼミの中で岡田地区でお話を伺ったときに、その岡田地区というのは浸水想定区域で、実際に浸水するところなんですけども、実際に防災について、浸水する５年前から話し合ってはいた。話し合ってはいたんだけども、浸水するとはまさか思ってなかった、すごく実際に被災したときに後悔して、何でなんやろうっていうすごい悔しい思いをしたっていう言葉があったんですよね。それって、私としてはなんですけど、聞いた感じでいうと、被災された人しか分からないことだと思うんですよね。それをちゃんとしっかり聞いたことで印象に残って、これを伝えなければいけないなっていうふうな思いが少しかき立てられるような感じがしました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。実際にお話を伺ってきて、無念とか、実際には備えてたけどもできなかったことが多かったっていうようなお話が聞けたということですけれども。

　ちょっとここで話のテイストを変えて、今、北村さんが話ししてくださった無念とか、実際にはできてなかったっていう人の、話してる人の顔をちょっと思い浮かべて、そのとき色って、何色でしたか。

○**北村さん**　何色。

○**中野コーディネーター**　色ってありますか。例えば林田さんにここでちょっと振ってみようと思うんですけども、林田さんもこれまで長田等で様々な体験を聞くという取組をされてきてますけれども、林田さんにとって、震災の話を聞いてるときの色って、何色だったとかってありますか。

○**林田コーディネーター**　この質問は、パネルディスカッションが始まる前に中野先生からしていただいたんですけど、私の中では青色でした。

○**中野コーディネーター**　何で青なんですかね。

○**林田コーディネーター**　経験された方の話を聞くっていうのは、やっぱり一つはすごくこちらも真剣に受け止めるべきことだと思うんですね。なので、そういうことを反映して、私の中では青色かなというふうに思いました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　では、私はですね、私もいろんな人からお話を伺って、もちろんいろんな色が出てくるんですけど、その中でもやっぱり印象に残るのはオレンジ色かなと思ったりするんですね。なぜかということ、ちょっと温かみのある、もちろんつらい話もたくさんあるんですけど、その中に温かみのあるお話もあって、そういうときには、何か自分の中ではオレンジ色っていうのが残ったりするんですよね。

　これで話は戻って、北村さんはどうでしたか。何かそういうのってありますか。

○**北村さん**　そうですね、後悔したときっていうのはす

ごく、僕の中では黒色かなって、何でだろうというか、どうしてだろうというか、もうどうしようもない反省の気持ちですよね。ただ、実際に反省して、反省というか振り返ったとしても、決して災害が起きた事実は事実なので、こっからまた前に戻って、もう一回どうすればっていうふうに考えても結局戻らないんですよね。でも、やっぱり後悔してしまうっていうところから、その後悔という部分の話を聞くところは、やはり黒色かなっていう感じ。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　では、続いて、山﨑さんはどうでしょうか、関大の山﨑さんですね。

○**山﨑さん**　関西大学、山﨑です。

　心に響いたこと、聞いて心に響いたことは、私の師匠である奥村先生からいただいた言葉です。何を言われたかといいますと、人生は偶発的だと、偶然を楽しみながら生きろという言葉をいただきました。その後、僕は、そうかそうかと。じゃあ、もう僕は偶然を見つける旅をしていこうと思いまして、今、行動する原動力という言葉に奥村先生の言葉を置き換えて、根拠となって、今行動しております。

○**中野コーディネーター**　なるほど。ちなみに奥村ゼミですよね、山﨑さん、奥村ゼミは、カラーでいうと何色なんですかね。

○**山﨑さん**　奥村ゼミ、カラーでいいますと、そうですね、青色かなと。その青色というのは、悲しい感じの青ではなく、ブルーオーシャンが広がったような、未開の地を開拓するような感じの青色かなと思っております。

○**中野コーディネーター**　なるほど。じゃあ、まさに新しい研究テーマ、山﨑さんは災害関連死のデータをまさに開拓をしていってるわけですけども、やっぱりそういう色とも非常にマッチしているっていうことですよね。

○**山﨑さん**　マッチしてる。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。

　じゃあ、このターン、最後になりますけれども、兵庫県立大学の仁木さんはどうでしょうか。

○**仁木さん**　兵庫県立大学の仁木です。

　聞いて心に残ったことっていうと、それは発表の中で少しだけお話しさせていただいたんですけど、Bloom Works さんが参考にしたインドネシアのシムル島の歌っていうことで、「スモン」という歌なんですけど、その歌が、今、若い世代の人には結構ポップな感じで伝わっているんですけど、もともと「スモン」っていうのは伝統曲ということで、すごい伝統楽器とかを使って歌うっていうのが正式なことらしくて、その歌い手っていうのも、継承者っていうのが正式にいるみたいなんですね。だけど、ポップな感じに変わってて、そういうところ、どうなんですかっていう質問を、Bloom Works のお二人が継承者の方にしてたんですけど、そのときに言われてたことが、地震の怖さとか逃げることの大切さが伝われば、もうそんなんどうでもいいんだっていうことで、伝統に縛られ過ぎずに、ちゃんと重要なこと、津波から逃げるっていうことを伝えられればいいんだよっていうことをおっしゃってたのが、すごい印象に残っています。以上です。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。またこれも色を聞きたいんですけれども、さっき伝統にとらわれなくてもいいんだっていうふうにおっしゃってた方の色ってどんな色だったんですか。

○**仁木さん**　ううん。

○**中野コーディネーター**　情熱の赤なのか、それとも何か恐怖を訴える黒なのか、あるいは非常に純真な心での白だったのか、その他の色か、どうでしょうね。

○**仁木さん**　何か黄色系の感じがしました。何か後光と言ったらちょっとあれなんですけど。

○**中野コーディネーター**　後光、なるほど。

○**仁木さん**　何か包み込むような色合いっていう感じの印象は受けました。

○**中野コーディネーター**　じゃあ、何かを伝えたいんだけれども、やっぱりそれはたくさんの思いを持っていて、その思いが後ろから後光が差すように感じたということですよね、きっと。

○**仁木さん**　はい。

○**中野コーディネーター**　ああ、なるほど、ありがとうございます。

　実はここまで本当にいろんな色が登場してて、黒、青、オレンジ、黄色っていうふうにきてますけれども、せっかくなので、じゃあ、最初に戻って、ぜひ皆さん、色をまだ答えていただいてない方にも色をちょっと考えてほしいなと思ったんですけれども。

　最初に戻って、舞子高校の大﨑さん、どうでしょうか。自分の学校の先生にいろんなインタビューとかされてると思いますけれども、ご自身がインタビューした先生を思い浮かべてもらって、中には担任に聞いたっていうこともありましたけれども、どんな色が思い浮かびましたか。あるいは冊子に色とか塗ってると思うんですけど、どんな色を使ったんですか。

○**大﨑さん**　私がインタビューした先生は、話を聞いているときに、何か泣きながら笑ってたんですよ。なの

で、暗めの色っていうよりかは、ちょっと希望というか、先が見えたようなオレンジ系の明るい色なんかなって思いました。

○**中野コーディネーター**　それはどんなことを話してるときに、ああ、何かオレンジ色だなというふうに感じたんですかね、どういうことを体験としておっしゃっていましたか。

○**大﨑さん**　その先生は、小さい頃は神戸のほうにいたんですけど、でも、姫路に引っ越して、震災を受けたのは姫路だったんですよ。ちっちゃい頃にずっと遊んでた友達とかが阪神・淡路大震災を神戸で受けて、ずっと姫路から連絡が取れないまんま、その子、どうなってるんやろって気になってたときに、大きくなってから、その子が大丈夫やったとか、そういう結果が分かって、何か当時のことを思い出して、でも、今はほっとしてるから、笑ったり泣いたりしてました。

○**中野コーディネーター**　ああ、なるほど。じゃあ、本当に震災が起きたときはその友達の安否が分からなくて、ちょっと黒みがかったかもしれないけれども、大人になって無事だったっていうことも知って、そういういろんな思いが込み上げてきて、オレンジ色に見えてくるっていうような、そういう感じですかね。

○**大﨑さん**　はい、そうです。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　じゃあ、明南、宮定さんはどうですか。

○**宮定さん**　私は、震災の話とかを聞いて、青色、悲しいちょっと青色なのかなって思います。

○**中野コーディネーター**　それは、なぜ青なんでしょうね。

○**宮定さん**　当時の話を聞いてるときに、やっぱり震災の話は悲しいことが多いと思うんですけど、そういう話を聞いてるときに、話してくださってる方の表情とか、震災に遭った後に、地域の人と力を合わせないといけないけど、やっぱりどこかに悲しい思いがあるっていうのを思って、青にしました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　続いて、彦根東の加藤さんですね、先ほどは多面的、多面体だというふうにもおっしゃってましたけども、福島でお話を伺ってく中での色っていうのはありましたか。

○**加藤さん**　そうですね。武内先生だけではなく、福島の取材を通じてなんですけれども、僕が取材させていただいた方々っていうのは、前向きになってる方ばっかりだったので、僕の感性で、あえてここは白色って言わせてほしくて。いわゆる震災があった後って、下手したらマイナスからのスタートなわけではないですか。そういった中で前向きに頑張っておられる方々の話を聞いて、何色も塗れるっていう意味の白色というふうに感じました。

○**中野コーディネーター**　ああ、なるほど、そうですね。いやあ、今、画面を見てて、皆さんもうんうんうんとおっしゃってたように、白色って確かに何色でも、やっぱりこれから前に一歩を踏み出していけるっていう非常に純粋な色なのかなというふうにも思いました。

　それから、D-PRO の藤田さんにはまだ聞いてなかったと思うんですけれども、ですよね。どうでしょうか。

○**藤田さん**　私が感じたのは、ほかの方も言っておられたと思うんですけど、オレンジ色で、実際の中溝さんの話もそうですし、いろんなゲームした後に聞く話もそうなんですけど、やっぱり過去のことを話しながらも、その目線というかは今とか未来に向いてて、こういうことがあって、じゃあ、次、これからはどうしていこうとか、これから自分の経験を生かしてどうしていこうっていうふうに目が向いているのかなっていうふうに思って、そのエネルギーというか熱っていうのが自分の中から湧いてきて、こっちにまで伝わってくるようなエネルギーというので、やっぱりオレンジじゃないかなというふうに思いました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、なるほど。私はオレンジっていう色を温かみっていう表現しましたけれども、藤田さんにとってオレンジっていうのは、前に進んでいく熱意みたいなもの、そういうふうに見えるっていうことですよね。

○**藤田さん**　はい。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。

　ここまで一通り話を聞いてきましたけれども、コーディネーターの林田さん、どうでしょうか、ここまで聞いてみて、ご感想ってありますか。

○**林田コーディネーター**　私は前半の活動発表も聞かせていただいて、やっぱり皆さんがすごく真っすぐ話してくれる方の思いっていうものを受けて止めておられるのかなと思って。やっぱり話していただく方も、皆様のように真っすぐ受け止めてくれる方に話すことと、皆様じゃない方に話す場合というのはまた全然違う話が話しされてるかもしれないし、そういうこともあるのかなと思いました。

○**中野コーディネーター**　なるほど。ちなみに林田さんが、ここで次、聞いてみたいことってありますか。

○**林田コーディネーター**　皆さんに。

○**中野コーディネーター**　はい。

○**林田コーディネーター**　その前に、中野先生が今まで聞いてきた中で心に響いてきたことを一度尋ねてもいいでしょうか。

○**中野コーディネーター**　なるほど、私に飛んでくるわけですね。そうですね、これ、何か面白くて、私は一応震災のとき、阪神・淡路のときは７歳、小学校１年生だったので、神戸市垂水区のほうで経験はしてるんですけれども、何か時間がたつにつれて、どれが自分に心が残っているか、心に残っていることが変わっていくんですよね。何か今大事だなと思ってること、心に残ってるのは、もう亡くなったんですけど、祖父ですね。おじいちゃんが、あるとき、多分小学校、私が２年か３年のときだと思うんですね。震災から１年、２年後に、震災のことを忘れたらあかんでって言った一言があったんですよ。それを私は結構最近になって思い出しました。それが何か大事だなと、そういうこともやっぱりあるから、今私がこういう活動にも積極的に関わっていける力になってるなというふうに思うんですね。そういうことがありました。質問いただいてありがとうございます。

　ぜひ、ここからもう一つ、皆さんに質問もしていきたいんですけども、時間も少し限られてきているので、ちょっと短めにと思ってはいるんですが。聞いていく中では、聞けないことってやっぱりあると思うんですね。ないですかね、聞けないこと。皆さん、いろんな話を聞く場、あるいは実際に何か取組をしている場、ゲームをしている場、地域の人たちと触れ合っている場、そして、データと向き合っているときでもそうですけども、何か聞けないこと、見えないことってあると思うんですけど、ぜひそのことを、これは聞けなかったなとか、ここを知りたかったけど分からなかったなっていうことがあれば一言ずつ伺いたいと思うんですけども、いかがでしょうかということで、次は逆回りで、最初に来ると思ってなかったかもしれませんが、県立大の仁木さんはどうですかね。実際いろんな、あまおだの皆さんとも連携されて、実際にフェスティバルをやって、いろんな方と話し合っていく中で、ああ、ここ聞きたかったけど、何か聞きにくかったなとかありますか。

○**仁木さん**　何で防災とか災害とかのことを取組を始めたのかなっていうことを、それぞれ個人個人に聞いてみたいなっていうのは思ってたんですけど、そういうことってなかなか聞きづらかったりしますね。

○**中野コーディネーター**　うん、やっぱりそうですよね。逆に、一緒に今日も発表してたあまおだの高校生の皆さんには聞いたことってあるんですか。

○**仁木さん**　いや、ないです。

○**中野コーディネーター**　ですよね、高校生でやってみようって思う人って珍しいっちゃ珍しいと思うんですけど、なかなかそれも聞けない。じゃあ、今聞いてみるっていうのはどうですかね。そこにいるんですよね。

○**仁木さん**　います。

○**中野コーディネーター**　誰かあまおだの高校生さんに聞いてみるっていうのはどうですかね。

○**仁木さん**　なぜ防災とかを始めようと思いましたか。ちょっとすみません、カメラ替わりますね。

○**中野コーディネーター**　手を振っていただいてありがとうございます。

○**仁木さん**　どうですか。

○**尼崎小田高等学校**　私はよくおじいちゃんとかおばあちゃんから、震災のときはこういうことがあってとかだったり、お母さんから、私が震災を受けたときはたまたま成人式の直後だったっていうこととかを聞いたりして、震災が起こったら、楽しみにしていたこととかもできなくなっていくんだなっていうことを聞いたり、できたかもしれないことも、私たちの努力次第ではできなかったりすることもあるので、少しでも災害に被災された、その被害を減らしていけるように取り組みたいなと思いました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

　仁木さん、どうですか、それを聞いて。

○**仁木さん**　すみません、ありがとうございます。何か僕もし始めたのが、大阪北部地震で自分自身が被災したからというのがあったので、高校のときに。そこから、そういうふうに努力していきたいなっていうのは同じなんだっていうふうに今思いました。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。そうやってあれですよね、多分、仁木さんとあまおだの高校生との間で、自分はこういうモチベーションでやろうと思ったっていうことが初めて聞けたっていうことですよね。

○**仁木さん**　はい。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。そうですよね。

　続いて、山﨑さんはどうですかね。

○**山﨑さん**　私は関連死のデータと向き合って見えなかったことがございまして、それは、関連死はプライバシーに関わることなので、詳細なことに関して、死亡日であったり、その方の属性であったり、そういう

ことが全然見えないというところが、データと向き合って分からなかったことです。

○**中野コーディネーター**　なるほど。それはどうでしょう、分かったほうがより防災にはつながっていく、災害関連死を防いでいくことにやっぱりつながっていくというふうには思うんですかね。

○**山﨑さん**　はい、そうですね。死亡日がもしあれば、死亡日と死亡原因で分類して、じゃあ、この発災後１週間までにはどういう死亡原因が多いのか、発災から２週間後はどういう死亡原因が多いのかっていうところを分類できますので、やっぱりあればいいんですけれども、そこはプライバシーのことも絡みで渡すことができないという状況になりました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。だから、今日発表してくれた山﨑さんの非常に詳細な研究の背後にも、やっぱり聞けなかったっていうことがどっかには残っちゃうっていうことですよね。

○**山﨑さん**　はい。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。

　では、神戸学院の北村さんはどうですかね。

○**北村さん**　私は、聞けなかったことといいますと、これは私個人のあれでもあるんですけども、いろんな被災体験聞いた中で、私の父なんですけども、友人を亡くしてるはずなんですね、阪神・淡路大震災で。だけども、その話っていうのを、やっぱり人の死っていうところで、タブーにしちゃってる自分がいるのかもしれないんですけど、少しやっぱり人の死っていうところが聞けなくて、20年、父と一緒に生活してて、もう４回、５回もいろいろ話を聞いてきても、やっぱりまだ聞けてないなっていうふうに、聞けないところというところ、少し思いました。

○**中野コーディネーター**　ああ、なるほど、そうですよね。やっぱり近い、自分の家族であるからこそ、どうしても触れちゃいけないのかなって思っちゃうところもありますよね。やっぱり私の周りでも、そういう、何ていうかね、ご家族はいて、でも震災から10年、それから20年、そしてもう少し時間がたっていく中で、何か急にぽつりぽつりと話し出すっていうこともあるそうなんですよね。だから、分かんないですけど、北村さんがそういうことをいつでも聞けるような体制であれば、きっといつか、そういう話も聞けるようになるのかなとも、個人的には思いました。ありがとうございます。

　じゃあ、D-PRO の藤田さんはどうですかね。

○**藤田さん**　自分たちでこうやっていろんな防災ゲームを今まで作ってきて、それをいろんなところに持っていって遊んでもらうっていう体験もしてもらってるんですけど、幾らアンケートとか話を聞いてみるとかで意見を聞いてみたとしても、それぞれの心に響いてるのかとか、その後、防災ゲームで学んだことだけじゃなくて、私たちは防災ゲームを通じて、その後、防災に関心を持ってもらえたかとか、防災に、じゃあ、実際に行動に移してもらえたかどうかっていうのがすごく大事なところなのかなっていうふうに思っていて、実際に行動に移したかどうかっていうのがやっぱり知れないっていうのが、このままでゲームはいいんだろうかっていう、改良に移すときに、じゃあ、どうすればいいのかっていうのが分からないっていうので悩むことは多々あります。

○**中野コーディネーター**　なるほど。じゃあ、やっぱり一番最初に答えてくださった気持ちの部分ですよね、気持ちの部分に本当に届いてるかどうかがうまく聞けないっていうことですよね。

○**藤田さん**　そうです。

○**中野コーディネーター**　この辺りどうでしょうね、林田さんは、何かアイデアありますか、一緒にゲームをした後で、どうやったら遊んでくれた人たちのハートの部分を聞くことができるかっていう、これまでの経験からありますかね。これは難しいですか。

○**林田コーディネーター**　そうですね、ちょっとすぐには出ないです。

○**中野コーディネーター**　そうですよね。これはすぐにはやっぱり答えが出なくて、なので、地域連携班の皆さんで、今後もハートを聞く取組をぜひ来年も続けていただいて、そのことを我々にも、こうやったらうまく聞けるんだっていうことを教えてもらえるとうれしいなというふうに思いました。

○**藤田さん**　はい。

○**中野コーディネーター**　ありがとうございます。

　じゃあ、彦根東の加藤さん、よろしくお願いします。

○**加藤さん**　お願いします。ごめんなさい、質問のときに落ちてしまっていたので、質問をもう一度聞かせていただいてもいいですか。

○**中野コーディネーター**　はい。体験を聞く中で、聞けることはあるんですけれども、聞けなかったことですね、どうしても。どうしても聞けなかったこと、ありましたか。

○**加藤さん**　分かりました、ありがとうございます。そうですね、取材の中で、ふたば未来学園高校さんの演劇部に取材したことがあったんですけれども、演劇部の部員さんたちに話を聞いていると、やっぱり同世代

で、先ほども言ったように、僕たちの世代の10年っていうのは、本当にもう人生のほぼ全部を占めるぐらいの割合で、その人たちがいまだ記憶に残っていることってやっぱりすごい重いことだなというふうに思って、いろいろ話を聞かせていただいたんですけども、被害を多く受けてる人に強く踏み込んだことを、例えば自分に起きた被害だったりとか、そういった踏み込んだことはあまり聞けなかったですね。

○**中野コーディネーター**　ううん、なるほど。そこは、やっぱり聞いたほうがいいですかね、聞けるようになったほうがいいと思いますか。それとも、そこはブラックボックスのように、やっぱり聞く側も聞かないほうがいいっていうこともあると思うんですよね。何かそのときはどっちでしたかね。

○**加藤さん**　そうですね。僕たちは伝えるメディアですけども、必ずしも全部を伝えなければいけないわけではないと僕自身は思っていて、実際にその人が話したくないことだったりとか、その人の心に深く傷として残っているものっていうのは、あまり僕たちがわざわざ伝えるっていうのはおせっかいにもなりますし、ひとえにいいことだっていうのは言えないと思っているので、そういった部分があれば、僕たちは踏み込んではいけない、伝えるべきところ、それだったら、わざわざ伝えたくないことを伝えるのではなくて、伝えれることをもっと広く伝えるっていうことが、使命なんていうことは言えないですけど、仕事なのかなというふうには思います。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。そうですよね、聞けないこともあるんだけれども、聞かないほうがやっぱりいいこともあって、そこも大事にすることも、「聴く」っていうことの方法だなということを、今お話を聞いてて思いました。ありがとうございます。

　では、明石南の宮定さんはどうですかね。

○**宮定さん**　聞きにくいことはやはり聞きにくいと思うし、話しにくいと思うので、私たちが人に尋ねて聞くのではなく、自分たちの行動で周りに影響を与えるということを心がけていて、その結果、相手に聞かせてもらうことが大事だと思っています。聞きにくいことはやっぱり私たちも聞きにくいですし、相手の方も話しにくいと思うので、私たちの行動を見て話してもらえるような活動をしているんですけど、そこで、私たちは傾聴っていうのを心がけていて、これはたくさん行ってきた地域交流の中でも成果を発揮しています。高齢者施設などにも訪問をしたりお話を聞きに行くことがあるのですが、自らお話をしてもらうことが多くなっています。聞こうとして聞くのではなくて、自然な会話で出てくることが大事だと考えます。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。非常にそうやっていろんな文字を出していただいて、説明してくれてっていってるので、多分これ、聞いてる人たちにとっても非常に分かりやすいなというふうに思いました。

　さらに、今の傾聴とか、そして、自ら赴いて話を聞くっていうことも、最初に紹介してくれた、まさに３つの聴くがベースになっていて、明石南の皆さんにとっては、３つのキクこそが一つの聴くっていう取組なんだなっていうことを改めて我々も理解できたと思います。ありがとうございます。

　では、最後になりますけども、舞子高校の大﨑さん、どうですかね。

○**大﨑さん**　私は先生とかにインタビューしてたときもそうなんですけど、被災された方の気持ちとか、怖かったとかつらかったっていう感情に触れるものを聞くのがちょっと聞きにくいなって、そんなに踏み込んでいいのかなっていうのはあります。聞きにくいこともそうなんですけど、そうやって、自分たちがインタビューの中で、当時、こんなことがあって怖かったんよっていう話を聞いたときに、じゃあ、それを自分たちがどうやって伝えようかとか、そういう言いにくいなっていう部分もあります。

○**中野コーディネーター**　なるほど。じゃあ、そういうふうに、やっぱりこう言いにくいなあ、伝えにくいなあっていう感情の部分とかを、今は冊子とか年表とか、それから、これから防災読本でしたっけね、そういうものにしていこうとしている中で、どんなふうに盛り込んでいけたらいいかなっていうふうに思っていますかね。アイデアなんかありますか。あるいは実際に冊子ですよね、プレゼンテーションの中でも紹介してくださって、その先生方のお顔があって、文章が、体験が書いてあるような冊子を見せてくれましたけども、ああいうところで、何かどういうふうにその感情みたいなところも、何かうまく伝わればいいかなという工夫とかってありましたか。

○**大﨑さん**　冊子のところには、文字とか絵だけなのでちょっと伝わりにくいなっていう部分があるんですけど、次の、また、震災メモリアル行事っていうのが舞子高校にはあって、そのときには、インタビューをしていただいた先生に、その先生にみんなに話してもらおうかなって、自分の口から言うんじゃなくて、その先生に話ししてもらおうかなって思っています。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうござい

ます。私は舞子高校さんの発表を聞いてて思ったのは、本当に先生の顔とか文字が全部手書きだったじゃないですか。あそこにも先生の、何ていうのかな、話してるときの感情とかも実は入ってたりするのかなとも思ったんですよね。そんなことはないんですかね。いや、別に誘導するつもりは全くないんですけど。そんなことはないのであれば、そんなことはないと言ってくれても全然大丈夫ですよね。

○**大﨑さん**　意識はしてなかったです。

○**中野コーディネーター**　ああ、そうですよね、分かりました。ありがとうございます。

もう時間になってしまいましたので、ちょっと最後にまとめに行きたいなとも思うんですけれども。ここまで、林田さん、話を聞いてきて、どうでしょうか、「わたしたちが「聴く」ことって・・・」っていうテーマで７つの団体からお話を聞いてきましたけども、最後の思ったことってありますか。

○**林田コーディネーター**　そうですね。いろんな「聴く」っていうスタイルがあると思うんですけども、やっぱり資料に載ってないこともあると思いますし、資料に載ってないことを、どうやってその経験した方から聞くかっていうのも大事だと思いますし、やっぱり私たちが受け止めていくっていうことも重要だなと思いました。

○**中野コーディネーター**　なるほど、ありがとうございます。

本当に今日、少し長丁場にはなってますけれども、午前中から皆さんの発表を聞く中で、何で私が唐突に色を聞こうと思ったかというと、皆さんのプレゼンテーションのいろんな制作物って、ゲームとか、活動の様子を見てると、すごくカラフルなんですよね。私は震災っていうとちょっと、やっぱりどちらかというとグレーとか黒っていうようなイメージを持ってはいたんですけど、でも、私の持ってるイメージとかも全く違う、非常にカラフルに、様々な「聴く」、聞いた結果のゲームとか、あるいは冊子とか、そういうものを作ってくださってる。それがとてもカラフルだったんで、皆さんにはその「聴く」っていうことがどういうふうに見えてるんだろうということを思って、まさに色っていうのを聞いてみようと思ったんですね。なので、黒、青、オレンジ、そして白、様々な色がやっぱり登場をして、まさに彦根東の方も言ってくれたように、一つの災害とかを取ってみても、本当に多面的な様々な色が共存してるんだなっていうことが、今日の皆さんのお話を聞いて分かったなというふうに思いました。

そして、もう一つ思ったのは、まさにゲームとかもそうだし、それから、最後のほうには、歌とかお花とか、そういうものって出てきましたよね。これも、お話の中にあったんですけども、やっぱり防災を堅いものだというふうに捉えられてる節があるんだっていうようなお話をプレゼンテーションされてくださった方もいらっしゃいましたけども、何か皆さんのいろんな取組見てると、何か堅く捉えられがちな防災っていうものを、いろんな色とかいろんな方法で柔らかくして、次の世代につなごうとしてくれてるんじゃないかなというふうにも思いました。

こういうふうに、本日はいろいろな色のある「聴く」っていう実践が行われている、そして、その中には、聞きたいけれども聞けないこと、あるいは聞きたいけれども聞かないことっていうことも同時に大事なんだということですよね。そうした様々な無念とか様々温かい気持ちとかっていうのも、じゃあ、どうやって伝えていけばいいのかっていうことを、皆さん本当に精力的に実践してくださってる、そういうお話が聞けたんじゃないかなっていうふうに思います。

今日は、皆さん、本当にご協力、そして様々な本当にすばらしいお話を聞かせてくださってありがとうございました。（拍手）

多分、ここで一度司会に返させていただいて、グラフィックの披露をしていただくということでよろしいんですかね。

○**司会**　はい、それで結構です。

それでは、コーディネーティングしてくださった中野先生、ありがとうございました。またご参加いただいた林田さん、そして、パネルディスカッションに参加していただいた各校の皆さん、本当にありがとうございました。

ここでグラフィックを担当していただいてる出村様、多田様が作成していただいてると思いますので、まずは、出村様のほうからご案内していただけますでしょうか。

○**出村さん**　分かりました。多田君のほうで全体の要点をまとめたものを１枚作成してくれてます。私のほうは、皆さんが話されたことをプロセスというか、皆さんが聞くときに、もう結果だけではなく、どんな表情だったかとか、どんなプロセスで話されたかっていうことを大事にされてるのかなと思ったんですけど、そういったところを書かせていただいたので、ちょっとご紹介というか返させていただければなと思います。これ、３分くらい大丈夫なんでしょうか、お時間。

○**司会**　どうぞ。

○**出村さん**　ありがとうございます。

全体としては、このようにすごくたくさんのお話をお聞きできました。全部お返しすると多くなってしまうので、私が特に大事に話しておられるように聞こえたなというところを黄色に塗らせてもらってます。

聞いて心に残った言葉はっていうところだと、小さな見えない声に耳を傾ける必要を感じたであったりとか、３つのキクの中でも、自分たちが影響をするっていうところを目指していますっていった声、あと、多面的というキーワードは最後までファシリテーターの中野先生も使っておられましたが、何度も出てきていて、私自身も同じ防災っていう切り口なんですけども、皆さんがそれぞれ自分の個性を生かされて、多様なアプローチをされるからこそ、多様な方の声が、多様な方の経験がここに集まってきているのかなっていうふうに感じたので、少しここは色をたくさん塗らせてもらってます。

あと、ゲームを通して心という言葉をよく聞きますというところで、考え方とか心の持ち方を変えられるように、ゲームは手段として使っていますというようなお声もお聞きしました。

また、色の話をどんどんされていく中では、どうしようない反省だったり、後悔、無念っていうところは黒色であったりとか、経験された方の話の中には、青色には少し悲しさを感じたりとか、また、温かみを感じるときはオレンジといったお話も聞こえました。

あとは、人生は偶発的だっていうあの言葉と一緒に、行動する原動力として、未開の地を開拓していくような気持ちで活動していますというふうなお声があったりとか、あと、この歌の紹介のところでは、伝統的な歌なんだけども、本当に大切なことが伝わるのであれば、少しの変化はいいのだというふうなストーリーを聞いたっていうお話は、すごくこの取組にも通じるのかなと思ってお聞きしていました。

あと、ちょっとこの辺はいろいろ、前を向いているとか、何色でも塗れる白色かと、そういったキーワードをお聞きしています。

あと、また時間がたつにつれて変わっていくっていうところもちょっと印象的だったんですけども、時間がたつにつれて、経験者の方も思い出すことが変わってきている、もしくは聞く側も受け取ることが変わってきているみたいなことを受け取りました。

後半は、もう記憶に新しいと思いますので、こういった形で、聞けなかったことっていうところには、やはりプライベートに関わること、人の死に関わること、あと、関わった後に起きたこと、そのほか、踏み込んではいけないなって感じるところは聞きづらいなというふうなお話も聞こえました。

一応私からは以上になります。

あと、皆様の元には、多田さんの１枚と、こちらの絵巻物をお届けする予定です。

よかったら、多田さんからも一言お願いします。

○多田さん　皆さん、お疲れさまでした。大変いい、すばらしい話が聞けて、非常に・・・・として満足してます。皆さんが色を言っていただいたので、すごいきれいな、カラフルな色のグラフィックになったと思います。

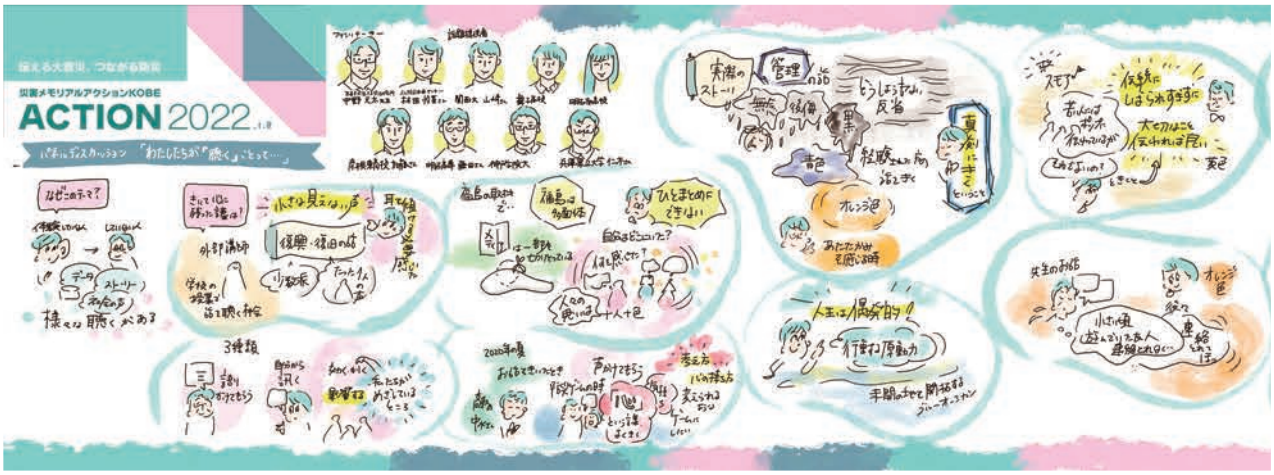
私も、何ていうんでしょう、グラフィッカーとしてだけではなくて、もともとやっぱり明石高専の D-PRO 出身で、もともとがこの参加者だった、パネリスト側だったっていう立場で、毎年聞かせてもらって、意見も言わせてもらってるんですけど、やっぱり全体として、何かこう、いろいろ聞こうとは努力するんだけれども、なかなか心の先にあるようなものに踏み込めないっていうような意見が結構出てたんですけど、結構、何か割と、そうですね、我々もだんだん10代の人も20代の人もいると思うんですけども、例えば私もみんながおっしゃってたように、僕自身も被災してますし、台風でも被災してますし、だんだん我々も経験を積んでいくことによって、だんだん未災者から被災者へっていうのが、このプロジェクト、大体この阪神・淡路を経験してない人が次の世代に、経験してないんだけども、語り継いでいくことが目的だと思うんですけど、我々もだんだん経験を積んでいって、だんだん被災者になっていってる人も多いと思うんですよね。だから、聞いている人の心の変化もそうだけど、もしかしたら自分たちもそういう心の変化が起こってるんちゃうかなっていうのは書いてて思っていました。ありがとうございます。お疲れさまでした。

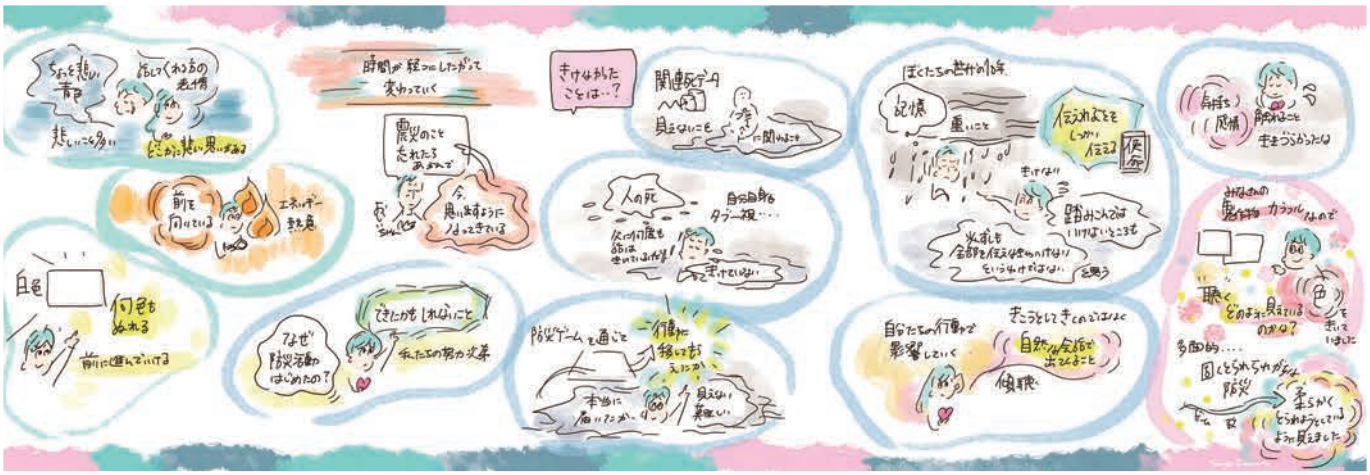
○司会　ありがとうございます。

ということで、今、チャットのほうにも、出村様から JPEG のファイル上げていただいているような形になってるかと思いますけど、また改めて、出村様と多田様に作成していただいたグラフィックのほうは、またご案内させていただくというような形になるかというふうに思います。

これで、後半のパネルディスカッションは終了となります。

グラフィックファシリテーション記録





閉会のあいさつ

河田惠昭センター長

○人と防災未来センター河田センター長

皆さん、初めまして、河田でございます。

ちょっと冒頭に悲しいお知らせがあります。実は、この災害メモリアルアクションKOBEっていうのは、今、６年目を迎えているんですけれども、もともとは阪神・淡路大震災が起こった翌年から、メモリアルコンファレンス・イン神戸というのを毎年やりまして、そのときの組織委員長だった新野幸次郎先生が、昨年12月13日にお亡くなりになりました。95歳だということです。先生は、メモリアルコンファレンス・イン神戸、今日のようなことを催物のいつも最初に、今日は牧先生が挨拶されたように、ご挨拶いただきました。この人と防災未来センターっていうのを2002年に発足しておりまして、それまでの７年間、このメモリアルコンファレンス・イン神戸をどこで開催するかっていうことも大変実は難しいことだったんですね。なぜかといいますと、実はお金がほとんどなかったんですね。ですから、私どもは、この開催費用をどうやって工面するかということも踏まえて、いろいろな努力をさせていただきました。そのときに新野先生が本当に私たちを励ましていただいて、その温かい言葉が毎回、この会を催すときの最初の挨拶に表現されていたわけで、新野先生がおられたので、ここまで27年間、形を変えてこういう催物を続けられたということで、本当に感謝しているということでございます。

さて、今日は、高校３件、高等専門学校２件、それから大学４件の合計９件の試みが紹介されました。私、それをずっと聞いておりまして、活動の分野が非常に広がっているという印象を受けました。震災の後行われたこのメモリアルコンファレンス・イン神戸では、いかにして被害を少なくするかということを中心に議論をしていたわけですけれども、今日のいろいろな話題、あるいはパネルディスカッションを聞いていただきまして、やっぱり我が国はどんどん豊かになっているという実感を私は持ちました。これも27年前に大変な災害を経験して、それの復旧、復興がいかに難しいかということを経験してきたことで、よく理解できるということなんですね。

今日、皆さんの発表を聞いておりまして、私、好きな詩人に、茨木のり子さんがいらっしゃるんですが、そこに、「小さな渦巻」という詩がありまして、これは一人一人の人間が真面目なことをやっていると、それがその小さな渦巻になって、いろんなところに飛んでいって花を咲かせるという、そういう詩なんですね。ですから、今日の皆さんが発表していただいたいろんな体験が、小学校、中学校、高等学校、大学、そして、卒業して社会人になって、ご家庭を持っていただいて、いろいろ人生を経験していただくわけですけれども、その場その場でこの花を咲かせるようなそういうものに、私つながっていくというふうに思っておりますので、これからもしっかりと防災に対する思いを、実は将来、花を咲かせるということで進めていただきたいと思います。

さて、うれしいお知らせがあります。今年10月の22日、23日、土日ですけれども、このHAT神戸を中心に防災国体が開催されることになりました。通常ですと、全国から１万人を超える方が、この神戸のHAT神戸に来ていただいて、この復興を見ていただくということにつながるということなんですね。皆さん、知っておられますか、HAT神戸っていうのは和製英語で、Happy&Active Townという意味で、幸福で非常に活動的なまちだということでつけられているんですけれども、これを全国の方に見ていただくということでございますので、皆さんも土日ですから、ぜひ参加してくださいね。まだ詳しいことは決まってないんですけれども、これから追って、人と防災未来センターのホームページで紹介していきますので、よろしくお願いいたします。

また、ご承知だとは思いますけども、兵庫県には、ひょうご安全の日推進県民会議という会議があります。会長は齋藤知事ですけれども、ここに、各分野の代表がおよそ100人ぐらい集まって、この阪神・淡路大震災の教訓をどういうふうに使っていただくかということを協議していますが、実は、来年度から、防災絵本100年計画というのが始まります。これは簡単に言いますと、毎年５冊ずつ防災の絵本を作って、これを各国の言葉に翻訳したものをインターネットで発信するという、こういう事業なんですね。なぜインターネットで発信するかといいますと、例えば防災教育といっても、結局、お金が実はかかるんですね。そうすると、途上国では、防災教育を進めるためにもお金が要るということで、今までネックになっていたんですね。これを、私どもは各国語に翻訳した絵本を使っていただこうと、しかも、その普及は各国の大学生にボランティアでやっていただこうと、こういう試みを、実はこれから100年間やるんですよ。だから、この場にいて、この話を聞いていただいても、皆さん、100年後は生きてないでしょう。ですから、阪神・淡路大震災の教訓を世界に使っていただきたいという思いが、これから100年間かけて実行されるという、そういうプロジェクトを開始いたします。まだ詳細は決まっておりませんけれども、私ども、これまで27年間、阪神・淡路大震災の後、世界中の皆さんに、あるいは将来の若者に阪神・淡路大震災の教訓を使ってほしいっていう願いをずっと持ってきているわけですけれども、それがこういう形で実行できるんだということに、皆さん本当に拍手をお願いしたいと思います。

ともあれ、もう阪神・淡路大震災から27年を経過いたしまして、兵庫県中心に、直接被災した人が本当に少なくなりました。もうすぐ全員未災者という時代に入りますけれども、私たちが経験した忌まわしい災害の教訓を将来に生かさなければいけません。南海トラフの巨大地震、あるいは首都直下地震、起こることは確実です。いつ起こるかが分からないという状況に私たち面してるわけですから、この日々の防災の努力というものがそのときに結実するというふうな思いで、これからも積極的に防災・減災の活動にコミットをしていただけると思います。

今日はどうもありがとうございました。（拍手）

災害メモリアルアクションKOBE2022のことば

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2022 のことば

私たちは震災の直後から震災の経験をどう共有していけばいいのかということで活動していますが、（中略）
「聞く」というのは震災を体験していない人が必ず通らないといけない道なんです。

インドネシアの伝統の歌は、
若者にはポップなものとして伝わっている。
それはどうなんですか?という質問に、
地震の怖さとか逃げることの大切さが伝われば、もうそんなんどうでもいいんだということで、伝統に縛られすぎずに、ちゃんと重要なことが伝われてばいいんだよと
おっしゃっていたことが印象に残っている。

様々な方から災害を受けた時の話を聞くと、
無念だったとかせっかく準備してきたと思っていたけども実際にはできてなかったんだなという後悔の思いが多かった。
災害に対して備えないといけないとは口だけで言うのは簡単だし、
実際に備えなあかんなという意識は持っていると思うんですけど、実際に
被災した方のお話を伺っていると、かなりそのことに**重みが出てくる。**

（震災の話を聞く中で）**「心」という単語を一番よく聞く。**
システムとか仕組みなど決まったものというのは、
災害の時にやっぱり壊れちゃうものだったり、もともとなかったりすると思う。
それがないところでじゃあどうしていけばいいのかなっていうので、
相手の気持ちを考えるという、当たり前のことなんだけど、
「気持ち」や「心」がキーになる言葉なんじゃないかなと思った。

相馬高校の出版局の顧問 武内先生の
「ニュースとか記事というのは、どこかを切り取らないと伝えられない。福島は多面体だ。」という言葉がスクール
メディアで記事を書いている者として心に残っている。
実際、震災当時にどこにいたか、どういう状況にあったか、
被害の度合いによって、人々の心情は十人十色。
それを全て伝えることはできない、ひとまとめに言葉にすることはできない。

被災された方の感情に触れるものを聞くことが
そんなに踏み込んでいいのかな?と思う。
感情の部分は、自分たちが伝えるときにも
言いにくいな、伝えにくいなと思う。

私たちは「きく」というのを**聞く・聴く（相手からの話を聞く）、訊く（自ら訊ねて聞く）、効く・利く（自ら行動して周りに影響する）**と3種類考えていて、
影響するということは相手に届いているということなので、自分から質問しなくても、相手に届いていれば、自ら相手が話しをしてくださるので、私たちはこれを目指して日々活動に取り組んでいます。

私は7歳で震災を経験してるんですけど、
時間が経つにつれて、心に残っていることが変わっていくんですよね。
今大事だなぁと心に残っているのは、おじいちゃんがある時、
震災から1年２年後に「震災のこと忘れたらあかんで」と言って、
それを私は結構最近になって思い出しました。
それが今こういう活動にも積極的に関わっていける力になってるなと思うんです。

このプロジェクトは阪神・淡路大震災を経験してない人が
次の世代に語り継いでいくことが目的だと思うんですけど、
私も北部地震でも被災してますし、台風でも被災してますし、
だんだん我々も経験を積んでいくことによって、未災者から被災者になっていっている。
時間の経過とともに話を聞く相手の心の変化もそうだけど、
もしかしたら自分たちも心の変化が起こってるんちゃうかな?とグラフィックを描いていて思っていました。

非常に**活動の分野が広がっている**という印象を受けた。震災の後に行われたメモリアルコンファレンス・イン神戸では、いかにして
被害を少なくするかということを中心に議論していたわけですけど、今日の発表、パネルディスカッションを聞いて、やっぱり我が国は
どんどん豊かになっているという実感を私は持ちました。

プログラム

伝える大震災、つながる防災

災害メモリアルアクションKOBE
ACTION 2022

KOBEのことば

定員：先着60名
参加無料

※密を避けるため、会場内の参加者数を常に60名以内に保ちます。60名を超える場合は、入場をお断りいたします。※会場にお越しになる場合は、マスク着用をお願いします。
※ 感染拡大の状況により会場での開催を中止とさせていただく可能性がございます。

活動報告会

日時 **2022.1.8[SAT]**
10:00→13:30

会場 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸（1996～2005）」、そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアル KOBE（2006～2015）」を実践してきました。

2016 年からこの先の 10 年を見据え「KOBE のことば」をキーワードに「災害メモリアルアクション KOBE」という取り組みを開始しました。阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形でつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば。今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来へつないでいく。今の KOBE だからこそできるアクションです。

近い将来起こりうる南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれないすべての人びとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために。「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。

私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

ライブ配信・アーカイブ

1/8当日は以下のFacebookページにてライブ配信を行う予定です。
また、1/8～1/31の間、アーカイブをご覧いただけます。
https://www.facebook.com/DisasterMemorialActionKOBE

プログラム

※敬称略

10:00 開会挨拶
災害メモリアルアクションKOBE 企画委員会委員長
人と防災未来センター 上級研究員
京都大学防災研究所 教授　牧 紀男

10:05 活動発表
発表：①兵庫県立舞子高等学校
②兵庫県立明石南高等学校
③滋賀県立彦根東高等学校
④国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム
⑤国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム
⑥神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑦神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
⑧関西大学 社会安全学部 奥村研究室
⑨兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム

12:30 パネルディスカッション
「わたしたちが『聴く』ことって・・・」
コーディネーター：京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 助教 中野元太
人と防災未来センター 研究部 研究員　林田 怜菜
グラフィックファシリテーション：株式会社たがやす　出村 沙代
大阪防災プロジェクト共同代表　多田 裕亮
パネリスト：災害メモリアルアクションKOBE 各参加団体代表者

13:25 講評・閉会挨拶
災害メモリアルアクションKOBE 企画委員会顧問
人と防災未来センター長　河田 惠昭

主　催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所
共　催：京都大学防災研究所自然災害研究協議会近畿地区部会
企　画：災害メモリアルアクションKOBE企画委員会
後　援　兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部/兵庫県立舞子高等学校/兵庫県立明石南高等学校/兵庫県立大学

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2022

全体テーマ：

KOBEのことば

「KOBE」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。阪神・淡路大震災から27年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBEのことば」を紡ぎ、活かし、拡げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

パネルディスカッションテーマ：

わたしたちが『聴く』ことって・・・

未災者から未災者へと語り継ぐことを目指す災害メモリアルアクションKOBE。未災者が語り継ぐとき、まず震災を「聴く」ことから始める。体験者に聴く、身近な先生に聴く、過去の記録に聴く、社会に聴く。様々な「聴く」スタイルを実践するメモリアルアクションの学生たちにとって「聴く」とは何だろうか。未災者の「聴く」を語り合おう。

兵庫県立明石南高等学校

日常の地域の繋がりが防災の原点という「土手の花見」を活動理念とする「有志生徒の集団」による地域防災チームです。発足から9年目となり明石市を中心とする地域の活動の幅が広がっています。「絆～地域で繋がる防災」をテーマにできることを楽しく取り組んでいます。

滋賀県立彦根東高等学校 新聞部

「福島をつなぐ」と題して東日本大震災や阪神淡路大震災、防災の取材をはじめて10年が経ちました。当事者でないのに伝え続けることに葛藤を感じながら、伝える意義を考えています。今年は滋賀で112年前に起きた姉川地震を取材し、今もなお姉川地震について伝える人々を取材しました。

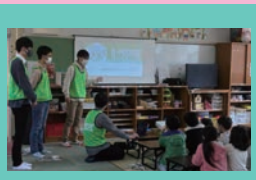
兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム

兵庫県立尼崎小田高等学校は、普通科看護医療・健康類型を中心として地域防災力向上に貢献する活動を継続的に実施しています。毎年、地域住民が参加できる「あまおだ減災フェス」を開催しています。また、兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムの学生は、「あまおだ減災フェス」の企画・運営を支援しています。ここでは、「あまおだ減災フェス」の活動内容、尼崎小田高等学校の地域活動について報告します。

兵庫県立舞子高等学校

「私たち」が、被災者と未災者をつなぐ架け橋になろう。これが舞子高校環境防災科メモリアルアクションチームの合言葉です。語り継ぐということをずっと大切にしてきた環境防災科の生徒として、体験者のことばを聴き、それを伝え広めることで、防災につなげていきたいと思います。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）



地域連携チーム

学校や児童館での防災授業と、地域のNPO法人と連携した防災ワークショップを進めています。避難所運営ゲーム「チャレンジ!」や防災ボードゲーム「RESQ」の体験、クイズを交えた講義などを通して、防災を楽しく学んでもらうことをコンセプトに活動しています。

開発チーム

防災ゲームの開発や改良、防災クイズの製作を行っています。今年度は、避難所運営ゲームをオンライン化した「チャレンジ!オンライン」改良や、防災カードゲーム「TRY!」開発を進めています。高専生ならではのアイデアが詰まった、遊んで学べる防災ゲーム作りを続けています。

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科

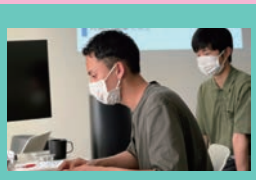
安富ゼミ

安富ゼミでは今年、「どうすれば人は逃げるのか」をテーマに、アンケートやインタビュー調査を岡山県倉敷市真備町岡田地区と神戸市灘区篠原台で実施。避難情報は多くありますが、実際に逃げる人は少ないのが現状です。なぜ、逃げないのか、どうすれば逃げてもらえるのか、考えています。

クローズアップ社会研究会

私たちは、現代社会学部の学生を中心に、身の回りで起こっている社会問題・時事問題について研究をしています。現在は選挙に見る首長候補の災害対策を公約という目線から研究中です！また、研究報告として各選挙にてルポルタージュなどを行い独自新聞を発刊中！

関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災で、大きな精神的ストレスと劣悪な生活環境によって失われる命があるということが初めて広く社会に認知されました。「災害関連死」です。私たちは、その後も繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

お問い合わせ：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課　Tel：078-262-5066　Fax：078-262-5082

本研究は京都大学防災研究所共同研究（令和3年度一般研究集会2021K-03）の成果によるものです。

災害メモリアルアクションKOBE企画委員会名簿

※2021年７月１日現在

役　職	氏　名	所　属
企画委員長	牧　紀男	京都大学 防災研究所 社会防災研究部門・人と防災未来センター
委　員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	卜部　兼慎	ＮＰＯ法人防災デザイン研究会 株式会社ＧＫ京都 第１デザイン部
	太田　敏一	防災リテラシー研究所
	大塚　毅彦	国立明石工業高等専門学校
	大山　武人	ＮＨＫ大阪拠点放送局
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	高橋　徹	兵庫県立明石南高等学校
	中野　元太	京都大学防災研究所
	西口　正史	ラジオ関西編成営業局
	馬場美智子	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	福岡　龍史	株式会社 エフエム・プランニング
	藤村　知行	彦根東高等学校
	桝田　順子	兵庫県立舞子高等学校
	本塚　智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富　信	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	横山　愛子	株式会社ＧＫ京都 第１デザイン部

サポーター	甲斐聡一朗	兵庫県災害医療センター
	越山　健治	関西大学 社会安全学部、人と防災未来センター上級研究員
	近藤　誠司	関西大学 社会安全学部
	諏訪　清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	松元　正博	ＮＰＯ法人 人・家・街・安全支援機構
	宮本　匠	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	矢守　克也	京都大学 防災研究所
	高森　順子	大阪大学大学院 阪神淡路大震災を記録し続ける会

顧　問	河田　惠昭	人と防災未来センター・関西大学
	土岐　憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	林　春男	防災科学技術研究所
事　務　局	後藤　隆昭	人と防災未来センター 副センター長
	筆保　慶一	事業部長
	多治比　寛	研究部長
	波々伯部仁	普及課長
	山本明紀子	普及課課長補佐（事務主担当）
	林田　怜菜	研究員（研究部主担当）
	ﾋﾆｪｲﾛ ｱﾍﾞｳ ﾀｲﾁ ｺﾝﾉ	主任研究員
	伊藤　潤	研究員

災害メモリアルアクションKOBE2022 参加学生名簿

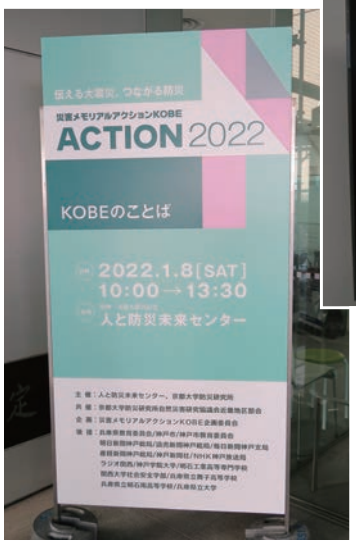
※順不同

グループ名	氏　名	所　　属	
兵庫県立舞子高等学校	三好　彩香	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3
	大﨑きらり	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2
	高橋　茉那	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2
	義村理央菜	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1
兵庫県立明石南高等学校	宮定　夢実	兵庫県立明石南高等学校	3
	髙雄　文音	兵庫県立明石南高等学校	2
	山本　魁星	兵庫県立明石南高等学校	1
滋賀県立彦根東高等学校	加藤　煌理	滋賀県立彦根東高等学校	2
	岡田みのり	滋賀県立彦根東高等学校	2
	橋本　　萌	滋賀県立彦根東高等学校	1
	住田　　英	滋賀県立彦根東高等学校	1
	宇田　優奈	滋賀県立彦根東高等学校	1
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム	長手　美澪	国立明石工業高等専門学校	2
	大坪　七海	国立明石工業高等専門学校	2
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム	藤田　　裕	国立明石工業高等専門学校	3
	尾崎友理奈	国立明石工業高等専門学校	3
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	藤嵜　隆太	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	松本　拓也	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	八木　颯太	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	木川　綾介	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	光瀬　晴夏	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	関　　航	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	佐桑　健介	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	東　　汰一	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	二星　雄大	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	兵山　穂香	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	角矢　久龍	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	2
	覺田　　怜	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	髙村　駿斗	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	母利　智哉	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	北村　昌卓	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	石井　　颯	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	中山あずさ	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	神農　大澄	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	中山　　翔	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	大西　佑奈	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	青野　柚花	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	三森　悠大	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	稲澤　遥樹	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	2
	圄松　万熙	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	2
	服部　仁美	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	1
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	山﨑　健司	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4
	栗田　直樹	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム	仁木　貴之	兵庫県立大学 国際商経学部	2
	土地　美聡	兵庫県立大学 環境人間学部	2
	中村　麻里	兵庫県立大学 環境人間学部	2
	河合　真月	兵庫県立大学 環境人間学部	2
	奥村なつめ	尼崎小田高等学校 普通科 看護医療・健康類型	2
	砂川　　茜	尼崎小田高等学校 普通科 看護医療・健康類型	2

発表風景等

キックオフ会（ワークショップ） 2021年8月16日

中間発表会（ワークショップ） 2021年11月13日



ACTION 2022

災害メモリアルアクションKOBE 報告書

災害メモリアルアクションKOBE
ACTION

令和3年度 災害メモリアルアクションKOBE 報告書

主　　催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
　　京都大学防災研究所
企　　画：災害メモリアルアクションKOBE企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内
災害メモリアルアクションKOBE企画委員会
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階
Tel：078-262-5066　Fax：078-262-5082
http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究（令和3年度一般研究集会2021K−03）研究代表者名：（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構人と防災未来センター長　河田惠昭、京都大学防災研究所自然災害研究協議会近畿地区部会の共催によるものです。